

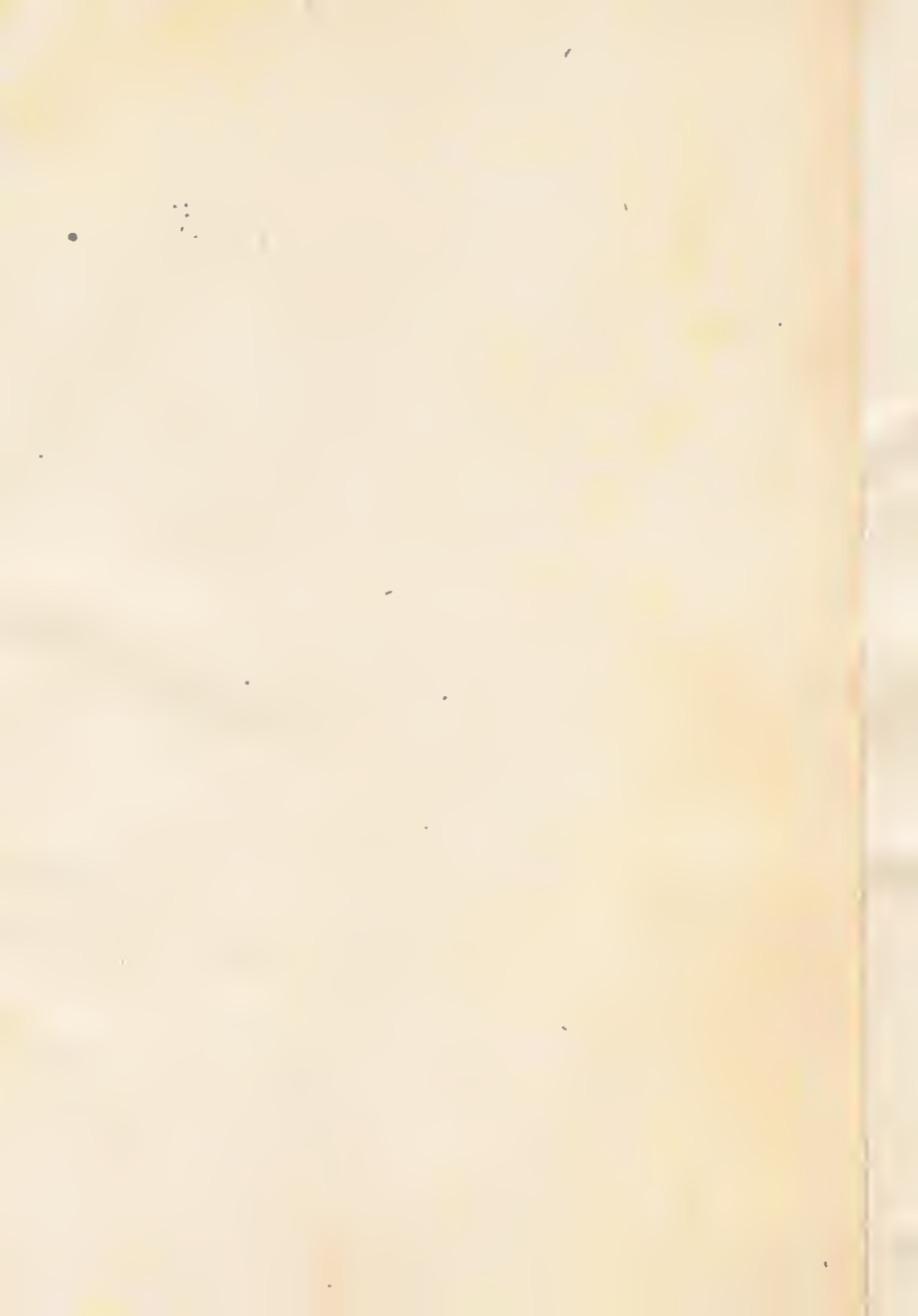
# イツ人形

土家由 岐雄











# 形人ツイド

雄岐由家土











も

く

ろ

く

一、母のたより	一
---------	---

1、ふるさとの春	三
----------	---

2、雪國の旅	二一
--------	----

3、クルーゼ人形	四〇
----------	----

二、鯉のぼりの町	六一
----------	----

三、星を賣る會社	七五
----------	----

四、	お晝のはなし	.....	八三
五、	月夜の人たち	.....	九五
六、	どんぐりの路	.....	一二七
七、	ヒットラー・ユーゲントの家	.....	一二七
八、	ねんど細工	.....	一三三
九、	奉祝の町	.....	一三九

装幀・挿畫……………内田 巖

ド  
イ  
ツ  
人  
形



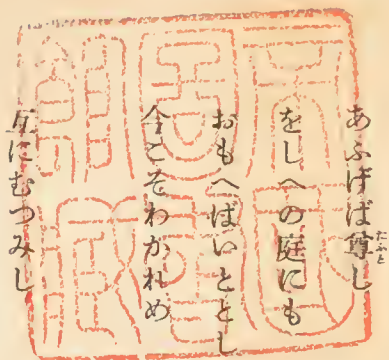


一、母のたより





1 ふるさこの春



別るる後にも

やよ忘るな

日ごろの恩

わが師の恩  
はやいくとせ  
このとし月  
いざさらば――

身をたて名をあげ

やよはげめよ

今こそわかれめ

いざさらば――

朝夕なれにし

まなびの窓

ほたるの、ともしび

つむ白雪

わするるまぞなき

ゆくとし月

今こそわかれめ

いざさらば――

『旅館  
下宿 本郷館』

と書かれた丸い軒燈が、雨つゆのよごれを見せて、暗い裏どほりの道のひとところを明かるくてらしてをりました。

その横から、棕櫚の花が、ちらちらとこがね色の花粉を、ところどころこはれ

た黒べいの外にちらして、五月の風は、あたたかな夜でありました。

せんたく屋の小僧<sup>こそう</sup>さんが、ついこの間の卒業式に、講堂<sup>かうどう</sup>でしみじみとうたつて別れた唱歌を口笛に乗せて、白ズボンの足を、くるくると元氣よくうごかしながら、散りかかる棕櫚<sup>しゆろ</sup>の花粉<sup>くわふん</sup>の下を、ちりりん、ちりちりんと、自轉車でとほろさはやかな夜だといふのに、下宿の二階では、大學卒業生である私が、お晝ごろからふとんを引つかぶつたまま、四疊半<sup>むよ</sup>のへやで、さびしい胸をかかへたまま、目をとちてゐたのであります。

町には、もはや櫻もちり、つばめも飛びかひ、ありも入れかはり立ちかはり穴を出て、あたりの明かるい風景をながめてゐる日が、毎日つづきますし、下宿屋のをばさんさへも、一日中よく働くふとつたからだから割烹着<sup>かつぱうぎ</sup>をぬいで、今日は着かへたセルの着物に日をあびて、十と八つの男の子に、水筒<sup>すゐとう</sup>と日の丸べんたら

を背おはせて、東京灣とうきやうわんのどこかへ、あさり、はまぐりをとりに行つたといふ季節なのに、私は、なんとしても、心さびしさにたへられなかつたのであります。

しかし、さびしいからといつて、このやうにねどこにもぐりこんでゐるといふことは、いま世界の國國から何彼につけてその偉大さに目をそそがれてゐるところの日本人が、とる態度であらうかと考へたとき、私は、やにはに、ぼろぼろとのびた髪かみをふとんの中からつき出して、ぱつと、はね起きたのであります。

とこにはいつた時には、まだ障子をみかん色の日がそめて、下宿の中庭に咲いた石榴ぎくろの花かげで、かごのひばりが、ひいちくとしきりにさへづつてゐたのに、いま目をさませば、「旅館りやくかん 下宿 本郷館」と書かれた軒燈けんとうが、窓の向かふにぼんやりとともつてどこからか、沈丁花せんぢやうかいのあまいかをりが、しんしんと鼻をうつてくるのでありました。

私は、へやの電燈でんとうをともしたのであります。

まくらもとには、さつき、ふるさとの母からとどいた卷紙の長い手紙が、まだひろげられたまま、白くてらし出されたのであります。

## 拜啓

お前はこの三月、大學をめてたく卒業して、もう二箇月にもなるが、東京で、いつたい何をしてゐますか。

會社、銀行員ぎんぎんになるのなら、早くつとめ口をさがして、そちらで一人前になるのもよし、また、家業かぎをつぐのなら、一日も早く、家へ歸つてくるがよい。學士がくし様さまとして、母がそんけいするお前は、かういふ言葉を、もちろん知つてゐること  
でせう。

（働かざる者は食ふべからず）

いま日本人のすべてが、心を一つにして、戦場に、或は銃後に、おのれをすてこんなかぎり、はをくひしばつて働いてゐるといふのに、お前のやうな若い者が、ただいたづらに、ぶらぶらしてゐるといふことは、このさい、不忠、不孝のかぎりと、お前の母は、老の目に涙が出ますぞ。

大學を卒業すれば、もはや學費もひつえうのないことゆゑ、お父さんとさうだんのうへ、今後はいつさい送らないことにきめました。

したがつて、こののち、金錢上のことで、他人様にお前がごめいわくをおかけしやしないかと思ふと、心配がまたふえる一方です。こちらはおぢいさんを初め、みな元氣で、おのおのの仕事に、朝から晩まであせ水をふくひまもなく働いてゐるから、お前も體をくれぐれも大切に、人間とうまれたからには、

これからさき、何をなさなければならぬかを、よくよくお考へのうへ、日本臣民としての、はづかしくないせきにんをおとりください。

お前が八歳のとき、思ひおこせば、小學校へ入學する日の朝だつた、小倉こくらのはかまをたくしあげて、しつかりと庭先に植ゑたなしのめばえ、いまがまつ白い花のさかりだから、一ぺん見に歸つてくればよいがなと、えんがはで花をあふぎながら、私はいま思うてゐる。

#### 母より

私は、手紙を両手でお願いたいて、幾回も、幾回も頭をさげたのであります。そして、母はいつもいつも私のことを心配し、さとし、はげまし、年ごとに、幾本かの白毛を頭にちらちらとまして、うまれた家へもどつて來なさいと呼んでをられる。ああ、すみません、すみませんと、私は胸をつかれる思ひでわびながら、

ふと目をとぢて、はるかに遠いふるさとの山河を思ひうかべたのであります。

うまれ故郷、三重縣桑名の町が、松平氏十一萬石の城下の家なみをととのへて、東に揖斐川の清流を見せながら、まぶたの中によみがへつて來たのであります。

春は、木曾山脈からとけて流れる雪に水かさをました揖斐川は、木曾からくだる筏のりの歌をひねもす水にひびかせて、町は、つみあげる檜材のほひと、明かるいひざしにみちてゐるのであります。

城あとのほとりに、桑名名物しぐれはまぐりを賣るささやかなわが家の軒下には、小手をかざして兩親が、雪夫や、雪夫やと遠い都會の空をさしまねいて、おいたうしろ姿を見せてゐるありさまが、ちらちらと、とぢたまぶたにあらはれて來たのであります。



私は目がしらにあふれて來たあついものにふと氣がついて、こぶしでこすりあげると、どこかで、ふいに、ほととぎすの聲がきこえたのであります。

見あげると、おぼろな月があるばかりで、その空のどこかで、また一聲きこえたのであります。

あ、ほととぎすが鳴いてゐると、私は思はず口に出したとき、ふるさとの少年の日に、揖斐川いひなにのぞんだ城あとの松林でつかまへた、ほととぎすのひなのことをなつかしく思ひ出したのであります。

揖斐川は春先になると、そのみなもとの冠ヶ岳かんがやまはりの山山の雪がとけて流れて、ごうごうと廣瀬川ひろせと合あひ、粕川かやがはとうちあつて、町の東北にあるこけむした城あとの石がきにしぶきを立てながら、伊勢灣いせにそそぐのであります。

ある晩春ばんしゆん、私は大ぜいの遊び友だちと、ぼうきれをふりまはして、草いきれに

みちた城あとの林をかけまはつてゐますと、とつぜん目の前に何か落ちてきて、びしやりつと、大地にわれたものがあるのでした。

なんだらうと見れば、二、三ミリもある大きさはすずめの卵によく似た、えび茶色の美しい卵が、うまごやしの花の上に、むざんにもくだけて、小さなきみが流れ出してゐるのでありました。

「あれえ。」

と、私は頭上を見あげますと、枝を入れまじへた青葉若葉の椎しじみの三つ又になつた場所に、小鳥のすが見えてゐて、そのすの、もう一つ上の枝のところて、うぐひすが、けきよ、けきよ、と鳴いたのでありました。

おお、うぐひすの卵だと氣がついた私は、大いそぎで、あたりにかくれてゐる敵、味方の友だちに呼びかけたのでありました。

『おい、みんな集れ、うぐひすの卵が天から落ちて來たぞう。』

『どれ、どれ、どこだあ。』

と、たちまち、木かげや、地にふして、どんどんどんと口でつばらを打つてゐた友人たちは、さらに元氣よく、ぼうきれをふりかざしながら飛んで來たのでありました。

皆は、いたいたしくわれた卵をまづとりかこんで、それから、ま上のこずゑをあふぐと、うぐひすと、そのすをみつけたのであります。

『うぐひすだ、』

『うぐひすだ。』

『誰か、とれく。』

『ようし。』

と、初めに見つけた私は、何かせきにんを感じて、すばやく椎こもの本によぢのぼつて、うぐひすのすに近づいたのでありました。

うぐひすのすは、芝草や小ざさのかれ葉などをよせ集めて出来てゐて、出入口が横にありました。

なかをのぞくと、卵はまだ三個のこつてゐて、しかも卵からかへつたばかりのひな鳥が一羽、大きな口をあけて、ゑをはこんでくる親鳥を呼んでゐるのでありました。

私は、そのひな鳥をそつとつかみ出すと、着物のふところに入れて、まもなく家へ歸つて來たのであります。

『お母かあさん、お母さん。うぐひすの子どもをつかまへて來た。』

『まあ、まあ、かはいさうに。どこからとつて來ました。』

『城あとの、林でつかまへた。』

『そんな所へつつこんでいたら、死んでしまふではありませんか。早くにがし  
ておやりなさい。』

『いやだ。』

『かはいさうに、うぐひすのお母さんが、あちらこちら鳴きながらさがしまはつ  
てゐるでせうに。』

『いやだ。』

『あなたが、もしもわるい人につかまつて、おうちへ歸してくれなかつたとした  
ら、どうします。』

私は、だまつてゐたのであります。

『そのときは、お母さんは町中をさがしまはつて、それでもあなたの姿が見えな

ければ、こんどは揖斐川のそこにもでもぐりこんで、あなたの名を呼びつづけながら、そこ石の一つ一つをとりのぞいてまでも、さがしますよ。』

私は急に、うぐひすの母親がかはいさうに思はれて來たのであります。

『それぢやあ、夕方になつたらにがしてあげる。』

『では、早くざるにでも入れて、ごはんつぶでもやつてごらんさい。』

私は廣いだいどころへ飛びこんで、大きな目ざるを持つてえんがはへ來ますと、うぐひすの子をかぶせたのであります。

ひな鳥は、しばらく元氣なく横たはつてゐましたが、やがて、いきなり、ばたばたと羽ばたきはじめたのであります。

母は、えんがはに腹ばひになつた私のうしろから、そのやうすをじつと見つめてゐましたが、しばらくの後に、はてなと、首をかしげたのであります。

雪夫や、どうもこれは、うぐひすの子ではないらしい。」

『なぜ、お母さん。』

『おなかの白いところはよくにてもありますが、背中が黒いし、第一、あさぎ色の、あのうぐひす色をしてゐませんもの。』

『だつて、うぐひすのすにゐて、まだほかにも、えび茶色のうぐひすの卵が三つものこつてゐたもの。』

『うぐひすによくにてもありますが、どうも鳴き聲がするどいし、もしかしたら、これは、ほととぎすのひなかも知れませんよ。』

『ほととぎすの子。』

『どうもさうらしい。ほととぎすといふ鳥は自分ですを造らないで、うぐひすのすへ自分の卵をよくうみつけておくものです。』

『どうして、そんなことをするの。』

『ほととぎすは、わるかしこい鳥です。自分の卵が色も形もうぐひすの卵にてゐることを知つてゐるものですから、うぐひすの親のるすに、うぐひすのすへ、うぐひすの卵とならべて自分の卵をうみおとしておくのです。すると、そんなことを、いつかう氣づかない親うぐひすは、どれもこれも皆自分の卵だ、それにしては少しばかり大きな卵が一つまじつてゐるくらゐに思ひこんで、一生けんめいに卵をかかへてあたためるのです。すると、ほととぎすの卵は、うぐひすの卵よりも早くひなにかへる卵ですから、ひなにかへつたほととぎすは、親うぐひすの愛を一人じめしようと思つて、うぐひすの卵をみな背中中で外へおし出して、こはしてしまふのです。』

私は、びつくりしたのであります。



『ほんと、お母さん。』

『ほんたうですとも、そしてほととぎすのひなは、うぐひすの親がはこんでくれるを自分ひとりでたべながら大きくなつて、つひにどこかへ、すだちしてしまふのです。』

『おどろいたなあ。』

『ですからうぐひすの事を、ほととぎすの假親かりおやといふ、別の名前までもついてゐるのですよ。』

私は母の話をきいて、うぐひすの親や、その卵にひじやうに同情したのでありました。そして、夕方になると、ほととぎすのひなをふたたびふところに入れて、この小さなわる者をどのやうにばつしたらよいものかと、揖斐川のふちに立つて、をりからの夕やけ空をながめてゐたのでありました。

夕ぐれ時の揖斐川は、ことに筏のれつがつづいて、筏のりがたくみにさす太い竹ざをにあやつられて、いくつもいくつも、檜材が木曾から組まれたまま、川上からはこばれては、長良川に出て、伊勢灣へ向かつて行くのでありました。さうだ、このほととぎすを、島流しにしてしまへ、かう思ひついた私は、ちやうどそのとき、二メートルほどさきへあやつられて來た筏に向かつて、いきなり、ぱつと、ひなを投げつけたのであります。

ひなは、筏の上によちよちと立ちあがつて、びつくりしたやうすであたりを見まはしたまま、夕やけ空をまつ赤にそめうつした川下へ、遠く遠く、筏のりの歌とともに流れさつたのであります。

なつかしい少年の日の、今は夢のやうな思出から、ふとわれに歸つた私は、しかしどう考へても、ふるさとのあのささやかな父母の店、名物しぐれはまぐりを

賣るこんののれんの下にすわつて、物見遊山ものみあそびの旅人に、あきなひをしようとは思はなかつたのであります。

と言つて、また、つとめをしようといふ氣にもなれなかつたのであります。

何としても、このまま、この大都會東京の空の下にしんばうして、石にかじりついてもなしとげなければならぬがひは、一流の人形つくりになつて、祖國日本の子供たちに、外國にまけないすぐれたお人形をつくりあたへるといふことが、をさない頃からの、私のたつた一つののぞみなのであります。

## 2 雪國の旅

『森田くん。』

「はい。」

「君は女の子みたいなやつだな。」

「どうして。」

「大學生のくせに、お人形ばかりへやにかざりたてて、よろこんでゐるやつがあるものか。」

友だちから、私はよくから言はれました。

また、かう言はれれば言はれるほど、お人形が持つ、あのやさしさ、あの美しさ、あのあどけなさを感じとることが出来ない人たちが、うらめしく思はれて、一そう強くお人形を愛しいたはる氣持が、私にはもりあがつて來るのでありました。

ですから私のへやには、もう百にあまる日本や外國のすぐれたお人形が、いつ

の間にならびかざられるやうになつてをりましたし、お人形のことをしるした書物も、書棚しよたなからあふれて、かべの前に山をきづいてゐるありさまなのであります。

私のお人形ずきは、誰でもがさうであるやうに、やはり、をさない頃からでしたが、心をかたむけて研究を始めたのは、大學の銀杏並木いんぎやうなみきの下を四角な大學帽子をかぶつて、くぐるやうになつてからのことでありました。

さいしよは、おひな様のことをしらべ始めました。

そして、おひな様といふものは、いろいろな災難さいなんや、厄病やくびやうを、私たち人間の身がはりになつて、引きうけてくれる大切な役目を持つてゐることを知つたのであります。また、それを作る人たちは、いづれも心身をきよめて、おひな様の自鼻をととのへ、髪かみにも、衣裳いしやうにも、こまかな注意をはらふといふことでありますか

ら、なるほど私たちの祖母や母が、おひな様をたいせつにとりあつかつたわけも、うなづかれて來るのであります。

おひな様のつぎに、こんどは、古い昔のお人形の研究を始めたのであります。

たとへば、嵯峨人形といつて、京都の嵯峨地方に名人がゐて作り出したお人形のこととか、あるひは、衣裳人形といつて、手足と首とが木ほりになつて胡粉をぬり、その他は金欄鹿の子などの、その頃のはやりのきれぢを使つて着つけをしたお人形のこととか、寛政からくり人形といつて、今から二百年ほど前の寛政の頃に出來た、手にささへた盃を、上げたり下げたりして歩くお人形とか、その他いろいろしらべましたが、それらを一一書いてゐては、たうてい、きりがありませんせんからやめますが、とにかくおひな様のことも、古いお人形のことも、とうの昔にお人形ずきな人たちがしらべつくしてゐて、私は、ただその研究の深さに感

心するより方法はなかつたのでありました。

これではならぬと、こんどは、日本全國のその土地土地で作られてゐる、郷土人形の研究を始めたのであります。

しかし、この研究は、どうしても一ぺんその地方へ出かけて、その土地の人情とか、地理とか、習慣、風俗をしらべておくことが必要であると感じたので、ある時、私は學校の冬やすみをりようして、福島、仙臺、盛岡、青森などの東北地方へ旅に出かけたのであります。

東北地方は、どこもかしこも、はげしい吹雪でありました。

福島の町でも、仙臺の町でも、私は雪にたたかれながら、一軒一軒大通の玩具屋さんののき下に立つて、その昔、松平氏の奥女中が手遊びに作つておくり物にしたのが始りといふ、顔が布の、胸から上を紙で作つて臺紙にさした、會津若松姉

様人形を買つたり、ねろねろねんねろ、ねたらばねずみに引かれべい、起きたら  
お應にさらはれべい、といふ子守唄が書かれた紙にくるまつてゐる、木ぼりの赤  
ちやんをせおつた、みやぎ野人形をさがしたり、その玩具の歴史を店さきの御主  
人から、ゐりりばたできいたりして、降りしきる雪に外套のえりをうづめながら  
歩いたのであります。そして、秋田縣の横手町といふ所に着いたときのことであ  
ります。町は夜になつてゐて、正月の十五日の雪は、びゅうびゅうと吹きあれて、  
一メートル先も見えないひどい吹雪でありました。

私はそのはげしい雪のために道にまよつて、町はづれの村に出てしまつたので  
あります。

道をたづねるにも家はなく、ぼんやりと路のまんなかにつつ立つて、雪にとざ



人につきあたられたのでありました。

『あれえ。』

と、向かふも、こちらも、びつくりして顔を見合はせると、その人は、頭からあごへ雪よけの黒いふろしきをすつぱりとかぶつて、わらの雪ぐつに、かすりのもんぺをはいた、十じ、八歳の娘さんでありました。

私は、ちやうど幸ひと、宿屋へ歸る道をたづねますと、その人は、夜目にも美しい目と口もとを雪あかりに見せながら、都會とくわいの私に、じゅんじゅんと路を教へてくれたのでありました。

そのとき、その人の肩にかついでゐた大きな包のかげから、わらたばにさされた色美しいお人形の顔が、ちらちらといく本ものぞいてゐるので、私は、ふとたづねたのであります。

『それは何んですか。お人形さんのやうですね。』

『さうです。串くしコアネコです。』

『串コアネコ、めづらしいお人形ですね。』

『ふだんはないものです。正月にだけ私のうちでこしらへて、町へ賣りに出す物です。』

『一つ、私にも賣つていただけませんか。』

『もう賣れのこつた品ですから、ほしければあげませう。晝からこの雪に降られたので、すこしぬれてゐるかも知れませんが。』

『けつこうです。』

私は、串のさきに二センチほどの布でつくられた串コアネコといふ、おかつばやおちごまげにした、美しい首人形を大事にたもた外套のそこふかくしまふと、その人

と、秋田の片みなかの、雪夜の路をわかれたのでありました。

教へられたとほり町へもどると、雪はやや小降りになつて、宿屋へまがる路ばたに、一つの雪室ゆきむろが目に入つたのであります。それは高さ二メートル、はばも同じほどの、かまど形をしたもので、内からは、ちらちらと雪路にあかりがゆれてゐるのであります。

はて、なんだらうとのぞくと、その雪室の内には、正面に水神様みづかみが祭られて、その前に紅白のごへいやお供物くもつなどがかざられて、らふそくの灯ひが祭壇さいだんに赤くゆれてゐるのであります。そして、そでなしのはおりを着た、もんぺ姿の三人の女の子が、むしろをしいて、七厘しちりんの火をかこみながら、表どほりをながめてゐるのがありました。

私はそのめづらしい有様に、しばらく雪室の前に雪をあびたままつつ立つてを

りますと、子供たちは、

『お水の神様に、寄進して下さんせ。』

と呼びかけたのであります。

私は、昔からこの地方に飲料水がとぼしかつたことを知つてゐたので、このやうなお祭が、いつのまにか、子どもたちの間に出来たのだなと考へましたので、いくらかのお金を水神様にそなへますと、子供たちは、私を雪室の内へまねいて、七厘にかけられたおなべの中から、あつい甘酒を、茶碗になみなみとごちそうしてくれたのであります。

これは、郷土人形をあつめに出た、東北地方の旅の一つの思出であります。この郷土人形の研究も、今さらに私がしらべるまでもなく、やはり、いろいろとりつばな本があらはされてゐたので、私は、いつたいどんなお人形を研究したら

よいものかと、ほとほとこまつてしまつたのであります。

そこである日、私は學校の庭で、池の鯉がぼーんと足下ではねあがる築山つぎやまにねころんだまましみじみと考へたのであります。

日本のお人形は、みな自分たち日本人の手によつて、けんきうが終つてゐるが、それでは、外國のお人形のことについては、どうなつてゐるのかしら、これをけんきうした日本人があるのかしらと考へたとき、これだ、これだと、ひぎをたたいてよろこんだのであります。

『おい、おい森田くん、何をそんなによろこんでゐるのだね。』

と、この時うしろから聲をかける者があるので、ふりむくと、同級の玉川君たまがわが、相かはらずふとつた體にまんまるい顔をにこにこさせて、立つてゐるのであります。

『おお玉川くん、僕は新しい研究にとりかかるよ。』

『なんの研究だね。』

『こんどは、外國のお人形だ。』

玉川君は、しばらく目をまるくして、私を見つめてゐましたが、やがてどなるやうに言つたのでありました。

『君は、二言目には、人形、人形といふが、そんなものをしらべあげて、どこが國家の利益になるといふのだ。君は頭のいいくせに、人形のことになると、やや氣狂<sup>きやう</sup>ひじみてゐるな。』

『さうか、それは申しわけがない。だが君は、これからの日本の子供に、ますます必要な心がまへはなんだと思ふ。』

『それは、自分をすてて、國のために役立つ武士<sup>さむらい</sup>の精神をやしなふことだ。それ

と同時に、たくましい體をきたへることだ。』

『さうだ、その通りだ。そして一つ、ひろびろとした、ゆたかな心、言葉をかへて言へば、大きな愛を持つた人間をつくることが、かんじんなのだ。』

『もちろん、大きな愛は必要なことだ。ことにこれからの日本人は、支那<sup>しな</sup>を愛し支那人を愛し、滿洲<sup>まんしゅう</sup>を愛し滿洲人を愛し、アジヤを愛しアジヤ人を愛さなければならぬのだからな。』

『さうだ。そのひろびろとした、ゆたかな心を子供のうちからやしなふには、まづお人形が必要なのだ。お人形といふものは、人間を形どつたものであるから、お人形をかはいがるといふことは、人間を愛することになるのだ。君は、このりっぱな日本をつくり上げたものは、いつたい誰だと思ふ。』

『それは僕らの兩親<sup>りやうしん</sup>や、祖父母<sup>そふぼ</sup>や、祖先<sup>そせん</sup>の人人だ。』

『さうだ。その人たちは皆、遠い昔から、桃の節供や、端午たんごの節供といつて、子どもどもの頃から、お人形にしたしんで來た人たちばかりなのだ。だから日本人は人を愛する氣持が外國人などよりよほど強く、おたがひが仲よくくらしあつて來たからこそ、このやうなりつぱな國と、すぐれた日本人が出來上つたのだ。すぐれた日本人といふのは、自分をすててかかる武士ぶしの精神と、たくましい體と、大きな愛を持つてゐるものだ。』

『なるほど。』

『そこで、僕は日本のお人形の研究を初めたのだが、これは皆、お人形ずきな人たちがしらべつくしてゐるのだ。そこで外國のお人形について研究をしようと思ふのだが、どうだ。』

『さうか、よし、では大いにやれ、わしは、もう何も言はん。』



玉川君は、ずしんずしんと築山つぎやまをおりて行つたのでありました。

私はその日から、ひとまづお人形から心をはなして、外國語の勉強を一心に初めたのであります。そして永い月日がたつた後に、いよいよ外國のお人形のことを書いた各國の書物を取りよせて研究にかかりました。するとつひに、世界でいま一番有名なお人形づくりは、ドイツのケーテ・クルーゼといふ夫人ふじんであることを知つたのであります。

私のへやにたくさんかざられた外國人形も、この頃から次第にあつめられたものでありました。が、さんねんながら、クルーゼ夫人の作品は、かげ一つさへもなかつたのであります。

またこのやうに各國のお人形がかべの四方のたなに少しづつ數をまして行けば行くほど、私の心をびしりびしりと打つてくるものは、クルーゼ夫人のお人形が

ないといふさびしさでありました。

ある時、もう町に秋風がさやさやと渡つて、人人の肩や帽子に、街路樹どろみじうの落葉がかさかさと言をたてる夕ぐれ、私は、かなりつかれて下宿にもどつたのであります。

ほこりまみれのくつをぬいで、げた箱につつこんでゐる私の姿を見て、さつきから玄關ぐんくわんの帳場ちやうばでまちかまへてゐたらしい下宿しやくどのおばさんが、聲をかけたのであります。

『森田さん、あなたはこの頃ひじやうにつかれた顔をしてゐなさるし、それに、いつも灯あかりがついてからもどりなさるが、學校では、いま時分まで勉強がありなさるのかね。』

『いいえ、百貨店へよつてくるのです。』

『毎日ですか。』

『さうです。』

『どの百貨店へ行きなさるね。』

『東京中のです。』

『へえ。東京中の百貨店へ。なんぞかはつた品でもありなさるか。』

『お人形を見に行くのです。』

『お人形なら、へや一ぱいに、あなたは持つてゐなさるではないか。』

『クルーゼのお人形なのです。』

『へ、なんですか。』

『クルーゼといふ、ドイツの夫人の作つたお人形をさがしに行くのです。』

『その人形に、なんぞ寶物たからものでもかくされてゐなさるか。』

『いやだなあ、をばさん。その人の作つたお人形といふのは、ちよつと見ると、いかにもぶつきらばうに出来上つてゐるが、見てゐれば見てゐるほど、お人形を通して、人間といふものを愛さずにはゐられない氣持がわきあがつて、つひには、見てゐる人にりつぱな人格をあたへてしまふといふ、世界にすぐれたお人形なのですよ。』

『そんなふしぎな人形がありますか、まさか生きてゐるわけではあるまいし。』

『をばさん、お人形には、みんな靈魂たましひがあるのですよ。』

『へえー、たましひがね。いやだよ森田さん、おつかないことを言つて——』

『いや、ほんたうですよ。僕が元氣な顔で歸つてくれば、へやのお人形は、みんなほえみながら飛びついてくるし、さびしくもどれば、どのお人形も、うなだれたり、なかには横を向いて、そつと涙ぐむものさへもありますよ。』

『森田さん、森田さん。ちよつと話をまつてくださいよ。私はもう二度とは、あなたのおへやへさうぢにはいきませんよ。全くきみが悪い。』

『これは、お人形を心からかはいがつてゐる人でなければ、ぜつたいにわかるものではないのですから、大丈夫ですよ、をばさん。』

『逢魔が時の、秋の灯<sup>ひ</sup>ともし頃だといふのに、こはい話をきかせてさ、からだぢゆうが、ふるえてくるぢやないか。さあさあ、電氣を明かるくともしますわい。』  
へやにかざつたお人形からさへも、私はこれだけの感じをうけるのでありましたから、それだけに、どうしても一度見たいのは、世界一といはれる、クルーゼ夫人のお人形なのであります。

ことに、雁<sup>は</sup>來<sup>い</sup>紅<sup>とう</sup>に雁<sup>かり</sup>がわたつて、東京の夜空にもひどきは流星が目だつ頃から、十一月、十二月の季節<sup>きせつ</sup>にかけては、外國船が白いマストに王冠<sup>わうくわん</sup>や三日<sup>み</sup>月<sup>がつ</sup>の旗をひ

らめかしながら、クリスマス用のお人形を船ぞこいつぱいにして、太平洋の波の向かふから、あるひは南支那海を渡つて入港するので、東京市内の百貨店のお人形だにも、日ましに、そのはなやかな數がふえていくのでありました。

萬一、その中にクルーゼのお人形がまじつてはゐまいかと思へば、とても私は學校と下宿へつづく道だけを、往復してゐるわけにはいかなかつたのであります。

### 3 クルーゼ人形

晴天に、梅の花がにほひ櫻が咲きました。

月の夜に、こほろぎが鳴き、しもがおりました。

そして、一年、二年とたつたのであります。

私はそのあひだ、町のほこりと、あかによごれた學生服で、毎日こんきよく百

貨店から百貨店をのぞきまはつたのでありますが、つひにクルーゼ夫人のお人形は何一つ日本には來てゐないことを、知つたのであります。

なせ來ないかをしらべると、この人の作品は、世界中のお人形ずきな人人が、目の色をかへてほしがつてゐるもので、クルーゼが一つの新しいお人形をつくりはじめたといふしらせが、風のやうにつたはつてさへも、地球のすみずみから、注文のでんばうや手紙が、そのりつばなおやしきへ、山のやうにとどくといふこととでありましたから、外國人形を研究する人のまれな日本へは、たうてい、海をわたつて、はるばると來る品ではなかつたのであります。

私は、もうすつかりあきらめて、ただ書物の上の研究でなぐさめたり、誰の作品とも知れないものでも、すぐれたお人形が目にとまれば買ふといふやうにして、百貨店から百貨店をめぐつてゐるうちに、だんだん外國人形のいろいろなことが

わかるやうになつてきたのであります。たとへば、このお人形はヨーロッパの物であるとか、アメリカ製であるとか、あるひはそれらの國の、どの地方でつくられた品であるかといふことさへもわかるやうになつて來たのであります。

『あら、またあのお人形學生さんが來てゐるわ。』

『どれ、あらほんたうだ。どうしてあんなにお人形がすきなのでせうね。』

『子供のころ、きつとうちがまづしくて、犬張子も、でんでん太鼓も、何一つ持てなかつた人にちがひないわ。』

『さうよ。かはいさうな學生さん。』

さいしよのうちは、人形部の女店員さんも、こんなかげ口をきいて、私のうしろから、よごれた學生服を指さしたものでありましたが、ながい月日を、雨の日も風の日も、とことことあらはれては、寫生をしたり、時には一つ二つと買つて



かへるものでしたから、いつのまにか、どの百貨店の人たちも私としたしくなつてしまつたのであります。

そして人形部では、産地のわからないお人形や、あるひは、どれくらゐのねだんをつけてよいのか、けんたらがつかないものが店にはいれば、それらはみな、私にいちおうたづねてから、ちんれつをするやうなことも、たびたびあつたのであります。

昭和十二年七月七日、とつぜん、蘆溝橋<sup>あしこうけう</sup>にひびきわたつた銃聲<sup>じゅうせい</sup>から、支那事變がまきおこつたのであります。

日本國民は、一億すべてが、がつちりとくんで敵にあたり、政府もまたお金が外國に流れ出ることを禁止したので、外國のお人形は、セルロイドのキューピット一つさへも、つひにわが國へは來ないことになつてしまつたのであります。

私は、今こそ外國人形にかはるお人形を自分がつくりあげて、祖國もていの子供たちにあたへるときではないかと、胸をもやして、その製作にとりかかったのであります。

それには、まづ、日本のお人形が持つあのすみきつた美しさと、外國のお人形が持つあの明かるい美しさとをとり合はせた、一つのお人形をつくり出すことに努力したのであります。しかし、悲しいことには、一年たつても、二年たつても私にはそれだけのお人形をつくり出すことができなかったのであります。

それは、今までの自分の研究が、すべてお人形にできあがつた品についての、よさわるさの研究ばかりでありましたから、さて自分がはじめから一つのお人形をつくることになる、どうやつてどろをこねたり、どんなふうに胡粉こふんをとかしたり、どんなぐあひに口鼻だちをととのへたらよいものか、ただまごつくばかり

でありました。

私は、つくづく自分のうかつさに腹をたてたり、あきれかへつたりして、製作を投げすててしまはうかと思つたことは數知れないほどでありましたが、これではならない、こんなことでは、いつそのこと、どこかのお人形屋さんへ弟子入りをして、はじめから小ぞうさんになつて、しんけんに學ばなければいけないと、ある日、とうとう下宿をとび出して、町のお人形屋さんへ向かつたのでありました。

町には、十二月のからつ風が、びゆうびゆうと吹きまくつてをりました。

道を行く人たちは、その風の中で、もうあと一週間にせまつたお正月のしたく物などを買ひととのへて、いそいそとすれちがつて行くのであります。私は、ふと立ちどまつて、ああ今日は、くれの二十五日であつたのかと、うつかりしてゐ

た日を思ひ出したのであります。

二、三年いぜんなら、今日あたりはどの百貨店にも、フランス人形をはじめ、いろいろとりどりの外國人形が、ずらりと陳列棚に人目を引きつけてゐるクリスマスの日ではあるが、いま國をあげて、大東亞建設の戦ひをつづけてゐるこのとき、國內にはどんなお人形がかざられてあることかしらと、ひさしく行かなかつた百貨店の方へしぜんとここに、足が向かつてしまつたのであります。

來て見ますと、銀座どほりは、人の波でありました。

遠い昔、私たちのおぢいさんや父親が、決死のかくごで戦つた、あの日清、日露以上の戦ひをいまつづけてゐるこのまつただ中にあつて、皇紀二千六百年の元旦を、あと五、六日でむかへる日本國民たちは、きりりつとした心のなかにも、それぞれ、奉祝のしたくをととのへてゐるのであります。

ふと仰ぐ冬日の空に、宮城のそとぼりからでも來たのでせうか、白い水鳥が二三羽、いまだ建國けんこく以來敵機にけがされたことのない帝都のま上をかがやきながら飛びかつてゐるのをながめながら、私は今さらに日本國民に生まれたありがたさに胸をつまらせて、自分は身を粉にしても、わが國の子どもたちをりつばにそだてあげるだけの、すばらしいお人形づくり師にならなければ、皇恩にむくいたてまつることは出來ないと、かくごをきめて、しづかに百貨店のかいだんをのぼりはじめたのであります。

ひさしぶりに、人形部へ足を入れた楽しいしゅんかん、私は、いきなり棒立ちになつていきをのんだのであります。

たな一ぱいにかざりたてた數千のお人形のなかから、さつと、一つのお人形が私の目にとびこんで來たからであります。それは、クリーム色のゆりかごに入れ

られた、白い産着うぶぎにくるまつた金髪きんぱうの赤ん坊のお人形でありました。

私は、ながい経験から、すぐれたお人形は、かならずお人形の方から私の目のなかにとびこんで来ることを知つてゐたので、胸をはずませてかけよつたのであります。

ゆりかごは、白いてんじやうから長くさげられて、天使のやうなをさな子が一  
人、すやすやと、やすらかなねがほを見せてゐるのでありました。

ほほゑみをたたへたそのくちびる、あどけなくとざされたそのまぶた、生きて  
ゐるやうな金髪、しかも狩かり二重ふたのやうなほほに、ゆたかな血色さへもうかべたあ  
りさまは、たうてい、これがお人形とは思へるものではなく、見てゐれば見てゐ  
るほど、胸に、何かすみかがやく神神かみかみしいものがやどつてくるので、私は大きな  
おどろきに打たれたまま、目をまるくして、しばらくそこに棒をのんだやうに立

ちつくしてゐたのであります。

ああ自分が今の今まで、よりによつて集めた百にあまるお人形が、たばになつてもおよばないこの一つの作品は、いつたい誰の手になるものであらうかと、私は感きはまつて全身ががくがくと、もはやふるへて來たのであります。

外國人形は、まちがつても輸入されない戦ひのまつさいちゆうであります。では、どんな日本人がこれを作りあげたものか。ふうむ、ふうむと、私はうでぐみしたまま、うなりつづけてゐたのであります。

『やあ、こんにちは、しばらくですなあ。』

と、このとき、顔見知りの主任店員しゅんてんかみんさんが、こみあふおかあさんや子供たちのうづをわけて、近づいて來たのであります。

私は、われにかへつて、あわててたづねたのであります。

『このお人形は、いつたいどこから來た、誰の作品なのです。』

『さあ、それが誰の作か、どこから仕入れたものか、さつぱりわからないのですよ。』

『なせです。』

『きのふ、倉庫のすすはらひをしたところが、物置になつてゐる第四倉庫から、ほこりまみれになつた箱の中から出て來たものですよ。』

『ふうむ。』

『今かざつたばかりで、まだねだんもつけてありませんが、どれくらゐのものでせうかしら。』

『ふうむ。』

『よく出來てゐますが、うなるほどの品物ですか。』



「さうです。じつにすばらしいお人形です。家のたからになるほどの品です。ちよつと僕にだかせて下さい。」

私は、手ざはりのよい、まつ白い産着うぶぎにくるまつたお人形をしづかにだきあげたその時、ふたたび、おどろきの聲をあげたのでありました。

手にふれたものは、ありふれたお人形のあのひややかな、愛あいのないつめたさではなく、二歳ぐらゐの體重と、しかも全身に、赤ん坊のあたたかみと、ゆめをみるやうな乳のかをりをただよはせたふしぎなお人形で、まるまるとざされた指先の一つ一つをそつとひろげれば、そのやはらかな指先にさへも、小さな力と、あたたかみがひめられてゐるのでありました。

私は、天下に、これほどのお人形づくり師がゐたのであらうかと、日本のお人形つくの人や、世界の有名な人形師に考をめぐらせたとき、

『クルーゼだあ。』

と、いきなり、自分でもびつくりするほどの、聲をあげてしまったのであります。あたりの人たちは、何事かと私をとりかこんで集つて來たのでした。

私はもう夢中<sup>ちゆうちゆう</sup>で、その人たちを目にも入れずに、お人形の金髪のなかから、足のさきまでを、一心にしらべはじめたのであります。そしてさいごに、小さな足のうらに目が及んだとき、そこにクルーゼと赤い糸がつつましくぬひこまれてあつたとき、私は、はりつめてゐた全身の力がいつぱんにぬけて、ほつと大きなためいきをついて、だきしめたお人形を、ふたたび見つめたのであります。

『クルーゼだ。やつぱり、クルーゼだ。』

『いい物ですか。』

『すばらしい、すばらしい。』

『ねだんは、どれくらゐにつけたらよい品でせうか。』

私はそんなことに答へるひまもなく、たのしいおどろきにひたつてゐたのであります。

『りつぱだ、じつにりつぱだ。』

『森田さん、ねだんは——』

『さあ世界中のお人形ずきは、何千圓出したつてこのお人形はほしがることではなう。』

『いまだき、千圓といふやうな、そんなばかなねだんもつけられませんし。』

『いや、これほどすぐれた物には、ねだんのつけやうがないのです。千圓でも二千圓でもそれは賣るねだんではないのです。クルーゼの作品のために、クルーゼ夫人のこのすばらしいお人形のための、ねうちなのです。』

『では森田さん、一千圓なら、あなたに買つていただけますか。』

今がまぐちに、その千分の五のおかねさへもない私でありました。

『とても、とても買へない。ほしいけれど、ほしいけれど——』

『では、仕入れが五十圓ぐらゐでせうから、まあ六十圓とでもつけて、かざつておきませう。』

『そんな、そんなばかなねだんをつけるのなら、僕はこれをかかへて、そのまどからにげだしますよ。ごらんなさい、このお人形は、ぜいたく品ではありません。よく見て下さい、人間の心にうしなひかけた美しいたましひをりんと引きあげる力があふれてゐるではありませんか。あなたはこれを見て、なんの感じもうけませんか。』

『いや、それがふしぎなことには、このお人形に非常に心をひかれて、これで四

五回のぞきに來るわけですが、こんなことは、十何年間お人形をとりあつかつて來ましたが、はじめてのことです。さつきから、じつに心がはれればとして、世の中が、あかるくなつたやうな氣がしてゐるのです。」

『それです、それです。このお人形の力によつて、あなたには、いつそう人間を愛し、仕事を愛し、心がわきあがつて來たからです。』

『では、とにかく、千圓とでも、二千圓とでもしておきますが、森田さん、あなたは、六十圓なら引きとつてくれますか。』

『六十圓——六十圓。』

私はとびあがつて喜んだのであります。そのしゅんかん、こんどは、胸を氷のやうにつめたくさせてしまつたのであります。

千圓でも、ありがたいねうちの。あるお人形ではありますが、私は、月月ふるさ

との兩親から、しぐれはまぐりを賣つたわづかな金銭をいただいて、學校へかよつてゐる身分なのです。どうして今さらに六十圓といふ大金を、べつに送つてくださいといふ書面を、年とつた兩親に出すことが出來ませう。これはなんとして、すべてのものをせつやくして、これだけの金銭をつくり出す方法をとらなければならぬ。それには、今までより以上に、手ぶくろを、くつ下を、えりまきを、これらのすべてをけんやくして、毎月十圓づつ貯金をすれば、半年にはこのすぐれた世界一のお人形が自分の手にはいることになるのだ。よし、よし、よしと、私は力いっぱいこぶしをにぎつて決心をしたのであります。

『買ひませう。しかし、今すぐにといふわけにはいきませんから、六箇月ほど待つてください。かならず僕がもらひます。』

『もしやりました、ふだんお世話になつてゐる森田さんのために、では、六箇

月間、も一度倉庫へしまつておきませう。」

『ありがたう、ありがたう。』

大ぜいの人目の中で、私は主任さんの手ををがむやうに兩手でにぎりしめたのであります。そして、弟子入りをするお人形屋に向かつたのでしたが、そのご主人は旅に出たままいつかへるともわからないるすなのであります。

私はその日から、すぐにみえとていさいでしてゐたえりまきをやめることにしました。その日一日は、何か首もとが、からつぽになつたつめたさを感じましたが、二、三日目には、もうすつかりなれてしまつたのであります。

つぎに、てぶくろをぬきとりました。これもその日一日、からつ風にさらされた手首が、みしみしといったみましたが、やはり二、三日の後には、へいきになつたのであります。

第三番目に、たびと外套ぐわいたうをぬぎました。これもえりまきやてぶくろと同じことで、あつてもなくても、よいものでありました。

私は、今までの自分のぜいたくさにおどろいて、まつたくなさけなくなつてしまつたのであります。

元氣さかな學生には、えりまきとか、たびとか、てぶくろとか、外套などといふものは、心がまへ一つで全く必要のないことを、はつきり知つたからであります。

私はその信念をもつて、すべてのことに努力と、せつやくをつづけました。そして、つひに四月、學校をそつげふした時には、四十圓といふうれしい貯金が出たのであります。町かどの郵便局の入口で、ちり、かかる櫻の花びらをあびながら、貯金帳をながめて、私はつくづくと考へたのであります。自分は今まで、



兩親の恩を感じて、一つぶのお米さへもそまつにしたおぼえはありませんが、なほその上せつやくをすれば、これほどの大金が、浮きあがるものかと氣がついた時、銃後の日本をせおつて立つ國民の一人として、今までの行ひに、心からはづかしい思ひで顔を赤くそめたのでありました。そして、あと二十圓といふところへ、ふるさとの母からさきほどの手紙が來たのでしたから、下宿のふとんにくるまつて、つひ、ためいきをついてゐたのでありました。(はたらかず、ぶらぶらせる者は、不忠、不孝の子なり。)

私は、母からの手紙をいくくわいも胸のそこであぢはつたのち、やにはに、こしかけてゐたまどから、すつくと立ちあがつたのであります。

ようし、やるぞ。こんないくぢなしの日本男子でどうするか。こんなことで、明日の新しい世界をつくりあげる祖國の子供たちに、大きな愛をうゑつける人形

つくり師になるなどとは、とんでもない考へだ。さいはひ、あしたは五月五日、男の節供だ。この日をふり出しに、何か職業を見つけ出して、しつかりとはたらかう。まづはたらいで、それからすきなお人形の研究だ。今こそ自分たちは誰もかれもが二人前の仕事をしてこそ、はじめて東洋の新しい夜明けがつけられるものなのだ。よし、さあこい。ああ、ふるさとのおとうさんよ、おかあさんよ、どうぞもうご安心なさってください。クルーゼのお人形よ、あなたももうしばらくしんばうして下さい。と、私は天にさけびながら、しみじみとおぼろな月をながめたのであります。

棕欄の花は、あひかはらずこがね色の花粉をちら／＼とちらして、お使ひがへのせんたく屋の小ぞうさんが、口笛を鳴らして、じてんしやをちりりとひびかせて、ふたたびまど下を通つて行くさはやかな夜でありました。

## 二、鯉のぼりの町





皇紀二千六百年五月五日。

端午の節供の鯉のぼりは、金色の矢車をからからとまはして、さつと晴天に吹きながしをひるがへしながら、大東京のすみずみにまで、はねあがつてゐるのであります。

私はこの日を、新しく生まれかはった自分の出発日ときめて、今日から世の中のははしい波風を乗りきつて行く自分を小さな一つの舟にたとへて、出発の場所も、舟にゆかりのある、東京驛前の日本郵船會社の八階だての屋上に定めたのであります。

屋上から宮城を遙拜すれば、玉の宮居は深深と松のみどりにおほはれて、その後方はるかに、富士山はまだ白銀の雪をいただいたまま、あたりの山山をはらひながら、ひとときはくつきりと、ひいててゐるのであります。

私は昨日までお人形以外になかつたとぼしいくらしを、今こそ海のやうにひろびろとさせて、屋上から七階へ、いういうとおりて來たのであります。すると、前のらうかに、(ドイツ・レンズ商會・日本總代理店)と金文字で書かれた、まどガラスがふと目にはいつたのであります。

私は、ならひおぼえたドイツ語がすこしでも役に立つて、萬一この商會につとめられることが出來たならどんなに幸福なことであらうかと思ひながら、のびあがつて、まどの内をのぞきますと、數人の日本人と、二十人ほどのドイツ人とが机をならべてねつしんにペンをうごかしてゐるのであります。

私は、自分の氣持を支店長さんにうちあけてみよう、と、ごめん下さいと言つて、とびらに手をかけたのであります。

やがてあんなにされた七階の應接室からは、はてしなくつらなる大東京のやね

と、むらさき色にかがやき渡つた東京灣の夏近い海がながめられて、間もなく私はそのへやで、たいかくのよい、りつばな口ひげをつけた支店長さんにお目にかかつて、自分のねがひを語つたのであります。

『私はこの三月に、大學をそつげふした者であります。今日までながい間、両親からいただいたおかねでくらして來ましたが、これからは自分ではたらいて生活をしていき、またいろいろ勉強もつづけたいと思つてをります。それには職業を持つことがひつえうなので、仕事をさがしてゐるのですが、今この事務所の前を通りますと、皆さんがねつしんに仕事をしてをられるので、出來ますことなら、自分もはたらかせていただければありがたいことと思つて、おねがひにあがつたやうなわけです。私は、ドイツ語を話すことと讀むことが、すこし出來ます。』

支店長さんは、たくましいひげと光る眼で、じつと私のたいどやふくさうを見

つめてゐましたが、その目にうつつた私のすがたは、まことにみすばらしいものがありました。

クルーゼ夫人のお人形が買ひたいばかりに、せんとく屋へも出さなかつた、よれよれになつた學生服に、赤青のゑのぐがこびりついたズボンをはいてゐます。

くつにはくつずみのかはりに、町のほこりが白く光つてゐます。

頭には、せつやくのために、とこやさんへも行かなかつた髪が、四方にこんがらがつてのびてゐるのであります。

私は、そのありのままのすがたで、ひざに両手をきちんとそろへたまま、しせいを正しくして、支店長さんのごへんじを待つたのであります。

『では、あなたの學校でドイツ語をしへてをられるホフマン先生を知つてゐますか。』



と、とつぜん支店長さんは、たづねたのであります。

『はい、よく知つてをります。ホフマン先生からは、ことにしたしくをしへをうけてをりました。』

『ホフマン君は、私の親友です。ではしばらくお待ちください。』

支店長さんはさう言つて、こつこつと出て行きましたが、やがてもどつて來たのであります。

『たいへんお待たせいたしました。彼は、あなたをよく知つてゐるとのことです。あなたは、まじめな青年で、すぐれたお人形の研究家であると言つてゐました。たゞあまりに人がよすぎるので、商賣をさせてもへたにちがひないし、私の店でレンズを賣る仕事をさせるには向かないとのこと。しかし、日本人として十分に信用の出来る、責任感の強い、りつばな男であると言つてゐましたから、

この事務所ではたらいでいただくことにしませう。」

私は急に胸が、どきんどきんとして來たのであります。

自分のやうな、お人形の研究以外にはなんのとりえもない人間は、いつも他人から、かはり者、かはり者と呼ばれるばかりで、はたらかうにも、はたらかせてくれる銀行會社といふものはどこにもないものときめてゐたのに、まだ屋上から百メートルもはなれない、しかも出發場所の足下にあつたのかと思ふと、あまりのふしぎさに、しばらくはきよとんと、きつねにつままれたやうな顔つきをしてゐたのであります。

やがて、私はただ一言

『しつかりはたらきます。』

と、力強く言つたときには、支店長さんはたばこに火をつけて、ひげのかげに

見える口をにこにことさせてゐたのでありました。

『先日、社員の一人がめいよある日本軍人として、天皇陛下のおめしを受けて、たたかひに行きました。あなたに、そののこされた机と、仕事を引きついでいただきませう。』

ああ、なんといふ光榮なことであらう。

『それから、あなたのふくさうと髪<sup>かみ</sup>の長さは、この店には向きませんが、なほしていただけますか。』

私は、あらためて自分のすがたを見なほしてから、うなづいたのであります。

『はい、なほさせう。はたらかせていただけるときまれば、今から床屋へ行つて來ます。ふくさうの事は、月給をいただく日まで待つてください。學校をそつげふしたので、故郷<sup>ふるさと</sup>の兩親に、もはや送金のしんぱいをさせたくはありません。』

『非常によろしいたいです。では、私の店ではたらくのですから、その支度金<sup>しだくぎん</sup>は私がさしあげることにしませう。』

と、支店長さんは、内ポケットから大きな赤がはのさつ入れをとり出すと、いく枚かの紙幣<sup>おきづ</sup>を私ににぎらせたのであります。そして、

『では明日から、午前九時までに出勤<sup>しゅつぎん</sup>してください。』

と、故郷<sup>ふるさと</sup>の父のやうにやさしく私のかたをたたいて、らうかまで送つてくれたのであります。

ビルディングを出た私は、丸の内の會社街にそびえ立つ大建築の下に、一人小さく立ちつくしたまま、今日の意外な出來ごとにしばらくはぼんやりとして晴天をあふいでゐたのであります。そして、手の中にしつかりとにぎられてゐる紙幣<sup>おきづ</sup>に氣がついたときに、今さらに支店長のドイツ人にたいして、これから自分がとら

なければならぬ日本人としての責任を、いはほのやうに強く感じて、さつと身を引きしめたのであります。

その前を、どこかの國民學校一年生の遠足のれつが、歌聲をはりあげて通つて行くのであります。

あをぞら たかく

ひのまる あげて

ああ うつくしい

にほんの はたは。

あさひの のぼる

いきほひ みせて

ああ いさましい

にほんの はたは。

男の子も女の子も、いちやうにそらした胸に、白いてぬぐひと、赤組青組の丸いしるしをきちんとさげて、二重橋の方へ元氣よく進んで行くれつは、さはやかな初夏の風を切つて、目にかがやきながら長くつづいて行くのでありました。

そのとき、

「をちさん、何をほんやりしてゐるんだい。」

と、とつぜん、すきとほる聲をかけられたので、私はびつくりして、そのれつを見まはしますと、下宿屋の男の子が、むらさき色のすゑとうと、はりきつたりユツクサツクを小さなかたにかけて 私の前をゐばつて通りかかるのであります。

た。

『おお、昭しやうちゃん。どこへ行くの。』

『をぢさん、遠足だぞ。』

『いいなあ昭ちゃん。』

『うん、遠足だい、遠足だい。』

と、子供はさらに手をふり、足をあげて、あたりのビルデングに歌聲をひびかせながら遠ざかつて行くのでありました。

私はそれを見送つてから、床屋さんへ行き、ふくを買つて下宿にもどつて來ますと、手の中に、二十圓といふ紙幣おひかねがまだ残つてゐたので、はつとクルーゼのお人形を思ひ出して、むちゆうで百貨店へかけつけたのであります。







三、星を賣る會社



國民服に丸ばうずになつた私は、その翌日、戦場に出る心がまへで出勤したの  
であります。

私の机のうしろには

祈武運長久 いのちばうんちゆうきゆう 草野宗吉君 くさのむねきちくん

と、筆で大きく書かれた紙が、かべにはられてあるのを見て、昨日の話は、こ  
の机にゐたこの人のことで、自分は今その残された仕事をうけついでやるのだな  
と感じると、私はひざをそろへて、草野宗吉君よ、森田雪夫がしつかり引きうけ  
ましたと、心にちかつたのであります。

そのとき、右となり机をならべた若いドイツ人が、はつきりとした日本語で  
聲をかけたのであります。

『僕はデーツエといひます。いつしよの仕事ですから、よろしくおねがひしま

す。」

『私こそ、どうぞよろしく。どんな仕事をしたらよいのでせうか。』

『あなたの仕事は、いづれ星を賣ることになると思ひます。』

『え?』

『この店では、ときどき星を賣ることもあるのです。』

『星? 星つてあの天にかがやく星ですか。』

『さうです。きらきらと出る星のことです。』

あの何萬といふ、夜空にきらめく星を、私はどことなくあひに賣りさばいたらよいのか、これは實に大へんなことになつたものだとおどろきましたが、すぐに、それは自分をからかつてゐるこのドイツ人の、明かるいいたづらにちがひないと氣がついたので、

『まさか、星を賣る會社なんてないでせう。』

と、私は言つたのであります。

『いいえ、この店は、レンズのほかに、星も、太陽も、月も賣るのです。なかなかおもしろい商賣でせう。』

とデイーツエ君は、にこにこと語るのです。

私はすっかりかたくなつてしまひました。うまれて初めてのつとめが、星を賣る會社とは、全く容易ならない仕事であります。

『僕に出来るかしら。』

『大ぢやうぶです。しばらく僕が賣つて歩きますから、あなたはその事務をとつてください。』

『事務なら承知しました。星をどこへ賣りに行くのですか。』

『新聞社へです。』

『新聞社へ。買つてくれますか。』

『もちろんです。向かふからとどけてくれと注文があるくらゐです。』

『ほう——』

私はあいた口がふさがらないとき、机の上の電話がちりちりんと鳴つたのでありました。

デイトツエ君は、すばやく受話器を耳にあてると、日本語で答へたのであります。  
『はいはい、さうです。え？ 火星ですか、ああさうですか、火星ですね。承知しました。ではさつそく、おうかがひいたします。はい、ごめんください、さやうなら。』

受話器が、がちやりとかけられました。

『それ、火星の注文が來たでせう。けつしてうそは言ひません。』

『なゝるほど、ほんたうだ。』

私は、いそいでへやの内を見まはしたのですが、だれ一人として今の電話にふしぎさうな顔つきをしてゐる者もなく、皆しんとしづかにペンをうごかしてゐるばかりでありました。

『ふうむ、これはおどろいた。』

『どうです。さあ、賣りに行きますから、いつしよに出かけませう。』  
『行きませう。』

私はこのふしぎな商賣をたしかめるために、デイトツエ君とかたをならべて外へ出たのであります。

外は天のおくにも海があるかのやうに、深くむらさき色に晴れわたつて、その

中から三機の軍用飛行機が隊をととのへてあらはれたのでした。デイトツエ君は小手をかざしてあふぎながら言ふのであります。

『日本、ドイツ、イタリヤ。この三國によつて、新しい世界がつくられます。』

『まつたくです。ことにわれわれ日本人は、アジヤに全責任を感じてをります。』

『まもなく、すべてのアジヤ人が、日本を太陽のやうにあふぐ日がくるでせう。』

『ありがたう、おたがひにしつかりやりませう。』

『やりますとも。祖國のめいよと、世界の平和のために——』

かたりあつて市役所の横を行くうちに、せんとう機はとうとうと頭上を通りすぎて、又むらさきの空の奥へきえさつたのであります。

『さあ、ここです。』と、デイトツエ君はふいに立ちどまつて、私を、まつ白い大きな建物の内へさそつたのであります。



#### 四、お書のはなし



並  
版



私はうでを組んだまま、夜空をあふいでをりました。空には遠く近く大小色さまざまな星かげが、大東京のまよなかの天をうづめて、私はその美しさにしばらくは心をうばはれてゐたのでありました。

その時や　みのなかから、ふいにデイトツエ君の聲が私の耳をうつて來たのであります。

『なるほど、火星があらはれませんな。』

私は、はつとわれにかへると、いまじぶんがしみじみとながめてゐる星空は、ほんたうの星空ではなく、ちよくけい二十メートルほどもあるてんじやうの内がはに、天象儀ゾウモクリウといふきかいからうつし出された星空であつたことに氣がついたのであります。

天象儀は東京日日新聞社の天文館てんもんくわんといふ五階だてのまるい一室にそなへてあり

ます。そしてまるでんじやうをかりの空として、そこに太陽、月、星などのうごきを實際と同じやうにうつし出して、みじかい時間に、むづかしい天文のありさまや、星のうごきなどを、手にとるやうにたやすくわからせるきかいであります。

またスヰツチのあつかひかた一つで、ペンギン鳥やおつとせいがすむ南極なんきょくの空も、白くまの子が氷の上であそぶ北極ほくきょくの空も、たちまちうつし出すことができます。すし、大むかしの空、たとへば、神武天皇様のお弓のさきにとびがとまつた日の空も、またこれからさき一萬年後の、日本の島島にかがやく星空のありさまさへも、はつきりとうつし出すことができますすばらしいきかいであります。

私は人がつくり出したとは思へないその星空の美しさに感心しながら、見物せきのくらい中にただ一人小さくこしをおろしてゐたのであります。

まはりのかへには、ひかげのない東京の深夜しんやの大建築物がくろぐろとすみゑて

ゑがかれて、それをうしろに見物せきがいくへにもぐるぐるとまるくつくられたまんなかに、五メートルあまりの大きなありが立ちあがつたやうなかつかうをした天象儀がおかれてあるのでした。

ディーツエ君はくわいちゆう電燈をちかちかとさせながら、天象儀の首にあたるやうなところをねつしんにしらべてゐましたが、やがて

『これでどうですか。』

と、聲をあげたのであります。

『やあ、出ました、出ました。』

と言ふ事務員さんの聲に、私も目をみはると、人間がすむとつたへられてゐる火星が、星のむれにひつそりとあらはれて、大星小星のかげをぬひながら、しだいに地球へ近づいて行くふしぎなありさまがながめられたのであります。

私はその美しい大空のうごきに、またたきもしないで見とれてゐますと、

『どうもありがたう、ごくらうさまでした。』

と言ふ事務員さんのおれいのことばといつしよに、満天の星はさつときえうせて、あかりがへやいづばいにもつたのであります。

やがて私たち二人は、天文館を出たのでした。

外にはお晝近い太陽がのぼつて、丸の内の會社街は食事に行く人たちが、もう夏帽子で出あるいてゐるのでした。

『あの天象儀は、うちの會社でこしらへたものです。世界にまだ三つしかないすばらしいきかいです。』

と、デイトツエ君は言つたのであります。

『さすがは科學の國ドイツです。おどろきました。』

『星を賣るしごとに、まちがひはないでせう。』

『なるほど、うまいことを言つたものですね。』

『二人の商賣は、天地四方があひてです。』

『まるで神様のやうなしごとですな。』

『さうです、さうです。』

私とデイトツエ君は、明かるくわらひながらかたをたたきあつて、あるビルディングの食堂へお晝ごはんにはいつたのであります。

向かひあつてこしをおろすと、私は今朝からデイトツエ君に話したくてたまらなかつた、昨日手に入れたクルーゼのお人形のことを、やつとこのときつけたのであります。

『デイトツエ君、君はクルーゼといふドイツ婦人を知つてゐますか。』

『クルーゼといふと、お人形で有名なクルーゼ夫人のことですか。』

『さうです。』

『あの人なら、ドイツ人で知らない人はないほど、お人形づくりでひやうばんの上流婦人です。』

『僕はその夫人がつくられたお人形を一つ持つてゐるのです。』

デイツェ君は、しばらく首をかしげてゐましたが、やがて氣のどくさうに言ふのであります。

『どうも、それはすこし私にはしじられません。なぜならば、あの夫人のお人形は、まだ日本へは一つも來てゐないやうに聞いてをります。』

『それを僕が持つてゐるのです。』

『では、ちよくせつ夫人から送つていただいたものですか。』



『いいえ、じつは——』

と、私は、百貨店のくから出た、ゆりかごのお人形の話をきかせたのであります。

デイトツエ君は首を横にふつたまま、そんなことではなほさらしんじることができないといふのでありました。

『クルーゼのお人形といふものは、どんな小さなものでも、一つ一つその行つたさきが、あきらかにされてゐるものです。たとへば、あのお人形はこの國のたれが持つてゐるとか、そのお人形は海をこえたどのやさきにかざられてあるとか、そのすべてがはつきりとわかつてゐるほど有名なお人形です。それがまだきたこともない日本の、しかも百貨店のくから、ほこりをあびてゐたといふやうなことは、とてもありえないことです。』

『では、今夜、僕の下宿まで見に来てください。』

『見ても、僕には人形のことはよくわかりません。』

『では、僕はクルーゼ夫人にちよくせつ手紙を出して、この僕のよろこびを知らせます。』

『それは、むだだと思ひます。クルーゼ夫人は、お人形のことについては、どんな手紙をいただいても、わづらはしくて、いつさいへんじを出さないといふことを、何かの本でよんだことがあります。それに第一、君のドイツ語はまだまだじやうずではありません。そんなドイツ語で手紙を書いたところで、あひてによく意味が通じるものでもなし、むしろお人形のことより、僕が毎日、ドイツ語をみつしちをしへますから大いにまなびませんか。』

『それはありがたいことです。ぜひぜひお願いいたします。しかし、それはそれ

として、僕ぐらゐクルーゼをそんけいし、僕ぐらゐクルーゼのお人形を愛してゐる日本人はほかに一人もないと思ひます。僕はどうしてもこの大きなよろこびを夫人にしらせます。たとへ文章はへたでも、お人形を愛する人どうしのたましひは、國や人種のへだてなく相ふれるものがあると思ふのです。デイトツエ君、もしクルーゼ夫人の住所を知つてゐるなら、ぜひ、をしへてくれたまへ。」

『有名な婦人のことですから、ベルリン市ケーテ・クルーゼ夫人で手紙はとどくと思ひます。』

『ありがたう、ありがたう。』

私はそれから二、三日のちの日曜日の朝、下宿の近くの寫眞屋さんをへやによびこんで來たのであります。そして、ゆりかごのお人形を自分のわきにかざると、百にあまるたなのお人形をうしろにして一枚の寫眞をとり、それといつしよによ

ろこびの手紙をそへて、つひに、ドイツ國ベルリン市、ケーテ・クルーゼ夫人のもとに送つたのでありました。

## 五、月夜の人たち





町の夜店にすぐ蟲賣りがいちまつもやうのかつぎ荷をおろして、となりにををならべたきんぎよやさんと、たばこの火をわけあつてかたりあふきせつになりました。

このあひだに、私はすっかり一人前の會社員になつてゐました。しかも、ドイツ人の事務所にはたらく身ですから、日本人としてのりつぱなたいどをやしなはなければならぬと決心して、たれよりもくわつぱつに、二ばいはたらくやうにしごとをはげんだものですから、支店長さんはじめ多くの人人から、森田さん、森田さんと、したしまれるやうになつたのであります。

ある日、デイーツエ君がこんなねがひを私にもつて來たのであります。

『森田君、どうぞをしへていただきたいものが一つあるのですが。』

『なんですか。』

『日本の紙ざいくです。赤い紙や青い紙で、つるを折つたり、やつこさんをこしらへる、あれです。』

『ああをり紙ですか。』

『さうです。ああいふ心のゆたかな紙あそびは、とてもヨーロッパやアメリカにはないものです。日本どくどくの美しいものです。どうぞをしへてくれませんか。』

『しようちしました。』

私はお人形つくりになりたいのぞみを持つてゐるだけに、ねんどざいくでも、をり紙でも、指さきでつくるものは、なんでもすきでありましたから、さつそく机の上の洋紙で、かぶとと、きんぎよを折つて見せたのであります。

『これはまつたくおどろくほどりつばなげいじゆつです。をりかたをわすれないやうに、どうぞ、づめんにかいてせつめいをしてくれませんか。』



私はお晝休のじかに、かぶとと、きんぎよの折りかたをづめんにかいてあたへたのであります。

デイトツエ君はにこにこと、長いゆびさきで生まれてはじめてをり紙のかぶとと、きんぎよを折り初めました。そして苦心のすゑづくりあげたものをへや中のドイツ人に見せて歩いたものですから、たちまち私の机は皆からかこまれてしまつたのであります。

『どうぞ僕にもをしへてください。』

『私にもをしへてください。』

私は、つるををり、かめををり、花かごをつくり、つばめをつくりました。そしてとうとうその日から、をりがみ先生とよばれるやうになつてしまつたのであります。

はたらけば、はたらくほど、たのしみがふえて行くのは世の中でありました。私は晝間は一心にはたらく、夜は、自分のたのしい時間を持ちたいと考へて、會社がひけてから、豊玉齋貞山といふ、お人形師の家へ弟子入りをしたのであります。

この家は、隅田川から外ぼりへつづく日本橋の川べりにあつて、船頭さんがさすさをの頭が裏のまどからひよこひよこことのぞいたり、かくれたりして、むし暑い夜は、空にきらめくいなづまが、見えてゐるのでありました。

『どろのこね方はこれでよろしうございますか。』

『おひな様といふものは、そんなこね方ではぜつたいにつくれない。』

『胡粉のとき方はこれでよろしうございますか。』

『そんなものは一日ではげてしまふ。千年萬年たつても、びくともしないものを

つくれ。』

貞山先生は七十歳に近い老人でありました。

やせた面長な、太閤秀吉にどこかにてゐる顔に白いあごひげをしごいて、會社ではをり紙先生である私をしっかりとばしながら、それでも一一手をとつてをしへてくれたのであります。

『私が、がみがみいふのも、あなたをりつばな人形つくりにさせたいからぢや。私はもうこのとほりの年で、手先もじふぶんではなし、また學問もない。ただ何十年といふあひだを、精神一つで人形にいのちをかけてくらしてきた。そして今日ではどうやら人様のあひだにも一流の人形師とよばれるやうにもなれた。あなたはまだわかいし、それに最高の學問もありなさる。したがつて私以上の人形師になれることは、精神しだいでじつにあきらかなことぢや。無學な、そしてびん

ぼふな私が、ここまでたどりついたといふことは、ただ精神一つであつた。この精神を、私はあなたに引きわたしたいがために、口やかましく、ぶれいにもどなりつける。先生と弟子といふものは、この精神のつながり以外には何もないのだから、あなたもじふぶんに私の心をくんで、がまんしていただきたいのぢや。わかるかな。』

『腹にしみわたります。』

『さうか。私は學問をしなかつただけに、老人になつてから、後悔こうかいすることが多いよ。あなたは、學問は死ぬまでやりなさいよ。』

『はい。』

『たとへ大臣になつても、また人形つくりになつても。』

『はい。』

まどに月がさしこんで、のきさきで、つばめのひなが鳴いてゐます。

『思ひ出すと、ちやうど今夜のやうな月夜であつた。今から三十餘年も前のことになる。そのころ私は大へんびんぼふで、お米も買へなかつた。そこで、とうとうある夜中、今あなたがすわつてゐるそのたたみを一枚はねのけて、こつそりと地めんをほりはじめたことがある。』

『なぜですか。』

と、私はおどろいて貞山先生を見あげたのであります。

『その下一メートルほどの地中をほれば、こすつたときに救はれる一つのお人形の型がかくされてゐると、先祖代代から言はれてゐるのぢや』

『ほりましたか。』

『すつかりほつた。』

『出ましたか。』

『出た。』

『何が出ました。』

『一つのかめが出てきた。』

『あけましたか。』

と、私はひざをのりだすと、燈をけした店さきをその夜は月光がそめて、青白い光のなかで數百のお人形が、耳をすまして貞山先生の話をきいてゐるのでありました。

貞山先生はじつと目をとちると、そのままだまりこんで、昔のまづしい日の思い出にふけるのか、目じりのしわに涙さへも浮かべたのであります。

私はその前にかしこまつて耳をかたむけてゐましたが、やがても一どたづねた

のであります。

『そのかめをあけましたか。』

『ところが、とても私にはあけられなかつたのぢや。』

『どうしたといふわけです。』

『見れば見るほど、いかにもそれは、古い古いかめであつた。何百年といふ前の祖先が、後後の子のために、まごのためにといふ、ありがたい心づかひから、大事にうめておいてくれた物だが、そのかめを今こそしつかりと小わきにかかへこんで、口をあけようとしたとき、いきなり私は、がたがたとふるへがきて、かめの前に、ばつたりとひれふしてしまつたのだ。』

私はじりじりとひざを乗出したのであります。

『かめの口には、遠い祖先がとぎしたふたが、そのまましつかりとはりついてゐ

て、いまだかつて、私の前にそれをあげようとした者は一人もないことを、はつきりと知つたからだ。これが、いかにびんぼふだからといつて、おめおめと自分の代になつて、あけられるものではないと私は思うたのだ。』

『うむ。』

『このかめが私につたはるまでには、いく代かのぢいさんばあさんが、まづしさとたたかひ、あるひは死ぬくるしみをしながら、人形づくりをして來たにさうわないのだ。しかも、誰もが地面の中にかめのあることを知りながらも、かめにたよつた者は一人もなく、みな自分の力でびんぼふも、くるしきもきりぬけて來た者ばかりだつたのだ。今さらこれをあげたら男がすたる。御先祖様の努力にたいして申しわけがないと感じた私は、自分のいくぢなさに泣きくづれて、眞夜中のゆか下でほかほかとこの頭をたたきのめしながら、すみませんすみません、と、



自分のよわい心をかめにむかつてわびたのだ。」

なるほど、私はそのたふとい氣持に強くなつたのであります。

『それからといふものは、私は死にもものぐるひで働いて働きぬいた。そして今ではこのやうな店をかまへ、人様から名人などと呼ばれる身分にもなつたが、かめは、祖先が最初にふたをしたままのかたちで、あなたがすわつてゐるそのたたみの下の地の中に、今もなほいけてありますよ。森田さん、人間にはふしぎな力があるもので、やらうと思つたことはかならず自分の力でやりとほせるものです。私はそのことを、これからのびて行く若い人たちにぜひ知らせたく思ふのです。』

うらの川づたひに隅田川へ出て行く涼み舟があるらしく、ろの音が月夜のまどにぎぎぎぎときこえて、水をかくひびきと、舟にゆられて吹いて行く尺八のながれが、美しく遠ざかつて行くのであります。

私は貞山先生をしみじみあふいで、よい先生をえたと、心をかがみのやうにすませて、やがて下宿へもどつたのであります。

下宿のげんくわんから、とんとんと二かいへあがらうとすると、轉場から、をばさんに呼びかけられたのでした。

『森田さん、さきほどからお客様がお待ちかねですよ。』

『はて、どなたでせうか。』

『赤ちゃんをおんぶした洋服のしんしさんです。』

いつたい、それは誰かしらと、首をかしげながら部屋のしやうじをあけると、二歳ぐらいの赤ん坊を白い夏服のひざにおろして、一心に乳くびから牛乳をのませてゐるしんしが目にはいたのであります。よく見れば、クルーゼ夫人のお人形を賣つてくれた百貨店の玩具部おもちゃぶの主任店員さんでありました。

『おお、これはしばらく、どうなさいました。』

『とつぜんおうかがひして申しわけありませんが、どうしてもあなたに願ひしなければならぬことが起りまして、たづねてまゐりました。』

『さあさあ、どうぞふとんをしいてください。赤ちゃんはおあなたのおぼつちやんですか。』

『さうです。じつは先月、妻に死なれました。』

『ほう——』

と、私は聲をあげたのであります。このやうなかはいい赤ちゃんを残されてなくなられたかたは、どんなに悲しかつたことであらう。また、これからさき、この赤ちゃんを男の手一つで牛乳をのませ、おしめをとりかへ、おかゆをつくつたりして、りつぱにそだてていかなければならぬこの人は、どんなにつらい雨の

朝をむかへ、風の夕をおくることかしらと思ふと、まぶたがうるんで來たのであります。

『ねむつたやうですね、さあこちらへねかせておきませう。』

と、私は主任さんの手から、ゆかたに乗りものづくしの電車、自動車、三りん車などをそめぬいた男の子をうけとると、まど近くにつるしたクルーゼ夫人のゆりかごの中へ、ドイツ人形と向かひあはせてねかしたのであります。そして母親をうしなつた日本の赤ちゃんと、祖國をただ一人、遠くはなれたドイツの赤ちゃんとが、おたがひにさびしい心を一つのゆりかごによせ合つた喜びに、小さな手と手をすがらせながら、いたはりあひ、はげみあつて、すやすやとねいきをたててゐるのを見たとき、しみじみと私は心をうたれて、しばらくはその前に立ちつくしてゐたのであります。

やがて、主任さんは、かになつた牛乳びんをポケットにつつこみながら語るのでありました。

『この子が母親とわかれてからは、泣きつづける日が多くて、ほとほと私もこまつてしまひました。母親がないといふことが、こんなに小さくても、もうわかるのでせうか。それがかはいさうで、私も商賣がらお店からいろいろなおもちやを買つてあたへるのですが、どれも手にとらうとはせず、つひにはいつも泣きねいりをしてしまふのです。森田さん、何とか一つ、母親にかはるやうなおもちやを作つてはいただけないものでせうか。』

私はうでをくんで考へました。母親にかはるおもちやとは、まことにむづかしいことであります。

『妻は子守唄こもりうたがすきで、毎夜のやうにこの子によくうたつてくれました。またこ

の子もそれをきくと、ふじぎなほどしづかにね入つたものです。いまだにその二人のすがたが、私の目にはのこつてゐます。それがこのごろでは、庭のえんさきにつるしたまはりどうろうの下で、しよんぼりと私がこの子をあやしてゐる日がつづくのです。』

私たちはいろいろな話のすゑに、とにかく何かのおもちやをつくることに私はやくそくをして、主任さんが歸りぎはにせおふ赤ちゃんのうしろから、私はおぶひひもをかけたのであります。

『森田さん、それで私は會社をやめましたよ。』

『なぜです。』

『子供をりつぱにそだてあげることが、日本人の父と母との大事な義務です。母がなければ父の責任は一そう重いわけです。それに、この子のほかにまだ國民學

校一年生をかしらに、三人の子がゐるので、とてもうちをあけて、つとめに出るわけにはいきません。』

私はだまつてうなづきました。そしてたづねたのであります。

『こののち、何のおしごとをなさるつもりですか。』

『うちで子供をそだてながら、童話を書きます。』

『童話をですか。』

『さうです。私は子供のころから童話を書いたり讀んだりすることが好きで、いまだに毎月よい本は買つてをります。それに子供の本にも二、三度書いたこともあるのです。』

『さうですか。しつかりやつてください。』

『やります。ただ私の童話はすこしかはつてゐるのです。それは、大人のことを

子供にわかりやすく童話で書かうと思ふのです。大人の世界には、子供たちに知らさなければいけないことや、をしへなければならぬことが、山のやうにたくさんあるものです。その童話を書く人が少いやうに、私はまへから感じてゐたのです。それを書きます。』

『どうぞいいのを、たくさん見せてください。』

『うんと勉強します。まづたくぼんやりしてはゐられないと自分をはげましてゐます。しかし、ひげのはえた洋服男が、牛乳びんのからと、ぬれたおしめづつみをこのやうにさげて、赤ん坊をせおつてゐるありさまは、人が見たらをかしいでせうが、私は今一生けんめいです。』

『何がかしいものですか、私にはあなたが美しく見えてなりませんよ。』

二人はかたをならべて、電車どほりへ出る細いみちを語りながら行きますと、



山の手の町はしづかに夜がふけて、今日の放送も今終るところか、ラジオがねんねんよう、おこりようと、やさしく自動音楽器じどうおんがくきを月夜の裏どほりにひびかせてゐるのであります。

私は、はつと胸をつまらせて、さうだ、この曲をうたふお人形を二つ作らうと、ひそかに決心したのであります。

一つは、かはいさうなこの子のために――

一つは、祖國を遠くはなれたクルーゼ人形のために――●



## 六、どんぐりの路





五月、六月と日はすぎて、秋も終りの十一月となりました。

小春日こはるひ和わがよくつゞいて、晝間は下宿の二かいから見おろす黒べいの中に、青木の實みが赤いたま、青いたまをかがやかせて、日がくると、その根もとに鳴きかはすこほろぎが、風に吹かれながら天の川をうちあふぐ頃となりました。

しかしクルーゼ夫人からは、なんのたよりもありませんでした。

私はそのあひだ、さびしいままにむちゆうになつて、二つの同じ形のお人形をつくりあげたのであります。

それは二歳ぐらゐの子供がにぎつて遊べるほどの、小さな赤いえのさきにお人形をとりつけたもので、ねぢをまはすと、お母さんが子供をあやすやさしさで首を前後にふりながら、お人形はえのさきでぐるりぐるりとまはりはじめののです。すると、白ぎぬでつくつた服がぱつとかうもりがさのやうにひらいて、そのすそ

にむすんだ七つのすが、ちろりん、ちろりんと音をたてながらまはるひやうしに、胸にかくした小さな自動音楽器から、子守唄が、ねんねんよう、おころりようとうたひだすしかけにしたものであります。

私はその一つを主任さんにおくり、ほかの一つをクルーゼのお人形に持たせたのであります。

ある朝、私は主任さんからたいへん喜びにあふれたお禮狀らいじやうをうけて、心あかるく會社へ出て行きますと支店長さんが、ふいに私の机に來られたのであります。

『おはやう森田くん、あなたにおねがひがあるのですが。』

『はい、どんな御用事でせうか。』

『社員たちの話によると、あなたは非常に工作が上手ださうですが、それをぜひをしへていただきたいのです。』

支店長さんがならふのですか。』

『いやいや私はよろしい。ヒットラー・ユーゲントの先生になつていただきたいのです。』

『私がですか。』

『さうです。いま日本には、ヒットラー・ユーゲントの家が二つあります。一つは神戸にあります。もう一つは東京市大森區にあるオバケヤシキを使用してゐます。この大森のはうへ毎週一回、金曜日の午後だけ工作をしへに行つてもらひたいのです。』

『どんなことをしへたらよいのですか。』

『をり紙や、ねんどざいくや、かな、のこぎりをつかつて、おもちゃなどをつくつてくださればよいのです。』

『承知しました。一生けんめいにやりませう。』

『今日は金曜日です。では今から私といつしよに來てください。』

間もなく私たちは省線電車を大森驛でおりて、右手の坂をのぼつたのであります。

このあたりは、ひっそりとした路のりやうがはに赤いやね、青いやねの異人<sup>いじん</sup>屋敷<sup>やしき</sup>が木木のあひだにかがやきを見せて、白くつらなるかきねのうちには、コスモスが赤くゆれて、もくせいが高くにほひ、道にはどんぐりがはかまをはいてこぼれてゐたのであります。

支店長さんと、私とは、ゆつくりとたばこをふかしながらその横をまがつたとき、二人は、おやつと足をとめたのであります。

行く手に十二、三歳の三人の日本少年と、同じ年ごろの三人のドイツ少年とが



三組にわかれて、上になり下になりして、こぶしをふり、足をけあげて、路上とみぞのなかに組合つてゐるのであります。

支店長さんはいきなり足を早めてそこへ近づくと、

『待て、ちよつと待て。』

言つたのであります。

六人のどろだらけなすがたと、血相けつさうをかへた六つの顔がつぎつぎに立ちあがつて私たちの前にならんだのであります。

『このありさまは、どうしたといふわけだ。』

ふたたび支店長さんが太い聲を立てると、はな血を出した一人のドイツ少年が一步前へ出て答へたのであります。

『日本の兵隊のはうが強いといふからです。』

すると同じくはな血を流した日本の少年が一人、こぶしをにぎつてその前へふみ出して叫んだのであります。

『ドイツの兵隊のはうが強いと言ふからです。』

『さうか。君たちは日本とドイツとが一體となつて、共同の敵をたふすことに努力してゐるのを知つてゐるなら、こんなあらそひはやめたまへ。祖國をうらぎるやうなおこなひは、日獨兩國民のなすべきことではない。あくしゆをしたまへ。』

六人の少年はひつそりとうなだれると、その頭上にころころと、秋ふかいどんぐりが落ちてくるのであります。やがて少年たちはうなづき合ふと、わるかつた、わるかつたと手をにぎりあつて、につこりと別れたのであります。

『さあ行きませう。ヒットラー・ユーゲントの家はあそこです。』

と、支店長さんが指さすかなたを眺めると、林の中の國旗けいやうたふにハー

ゲンクロイツの旗がひるがへつて、合唱するドイツ國歌が、朝風にひびいて來たのでありました。





七、ヒットラー・ユーゲントの家



だらだら坂の中ほどに、表札もない古ぼけた冠木門が、すこし前のめりにかたむいたまま、秋風にたたかれてをりました。

私は支店長さんにつれられてその門をくぐると、げんくわんにつづく小路の両がはからは、もみちが赤くおひかぶさつてゐて、どこからか桂の花のかをりが美しく流れて来ると、やがて正面のをかに、のきのゆがんだ日本づくりの廣い二階家があらはれたのであります。

庭は、をかと谷とをもつた數千つぼもある木木のしげみで、ドイツ國歌は、その築山の廣場にひるがへるナチスの旗の下からひびきわたつて、そこには、せいにれつをした六、七十人のヒットラー・ユーゲントが、少年は黒の制服、半ズボンに短劍をつるして、少女は白の上着に黒のスカートを秋風になびかせて、身うごきもしないで合唱をしてゐるのであります。

それと向かひ合つた號令臺の上には、やはり制服の少年が一人、胸をそらして口を引きむすんだまま、右手をななめ前にぐつとつき出して、ナチスのけいれいで目をかがやかしてゐるありさまが私の目にうつたのであります。

『森田くん、ちやうどいいところへ來合はせましたよ。』

と、支店長さんは、私をかへり見たのであります。

『今ヒットラー・ユーゲントのワルターリンといふ少年が、ドイツ軍のアルプス聯隊<sup>れんたい</sup>へ入營をするので、その送別式がおこなはれてゐるところです。

私たちはうしろから、しづかに身をととのへて、式をながめてをりました。

ユーゲントの歌聲は、十一月の晴天に明かるくきよらかにひびきわたつて、私のかたはらには桂<sup>かづら</sup>の花が白白とかをりをましてゐるのでありました。

やがて式は終ると、私はその場で號令臺にのぼせられて、ドイツ學園<sup>びとくえんちやう</sup>長レデカ



先生から皆にせうかいされたのであります。

『このお方は、われわれがつねにそんなけいしてゐるところの日本人である。名前は、森田雪夫さんとおつしやる。今日から君たちに工作をしへていただくことになった。君たちは、ドイツ國のめいよにかけて、はげんでもらひたい。終り。』

すると、班長さんらしい十八、九の少年が一人、左にナチスのしるしをまきつけたうでをふつて、くわつばつに私の前に進み出て來ると、青い目をすまして、さつと右手をかかげたのであります。

『われわれは、森田先生のをしへのもとに、一心に工作を勉強することを、ヒツトラー總統にちかふ。』

町を見おろすをかの上には、さはやかな朝の日ざしがあふれて、そのかがやきのなかに直立不動のしせいをした私の目に、谷をへだてた木木のあひだから、皇

紀二千六百年の奉祝日をあと數日でむかへる、東京の町町が、紅白のまくをめぐらし、をどり屋臺の紅ぢやうちんを秋風にゆらせてゐるけしきが、すがすがしく眺められたのであります、

私は、かうしてヒットラー・ユーゲントの工作の先生になつたのであります。

しかもヒットラー・ユーゲントの先生として、外國人では私が世界中でただ一人であることを、この日知つたとき、ドイツ國民の前に、一億の日本人をせおつて、すつと立ちあがつた責任を私は強く感じて、どんなりつばな日本人にも、決して負けないだけの自分をつくりあげなければならないと、心のうちで兩親にちかひ、祖先にちかひ、國にかたくちかつたのであります。

# 八、ねんど細工



出  
版



とこのまに菊の花をかをらせた、竹の花いけをかざつて、その上にヒットラー  
總統の寫眞をかかげた八疊と六疊のへやのふすまをとりはづして、まんなかに大  
きな圓いテーブルをおくと、その上に、板、糸のこぎり、やすり、ねぢまはし、  
ねんど、へらなどをならべて、私は工作場所をつくつたのであります。

ヒットラー・ユーゲントは、満十歳から十七歳までのドイツ少年少女からえら  
ばれた者からなるので、をさない者には、ねんどざいくををしへて、十三歳前後  
の者にはドイツ軍人がざんがうで遊ぶ、玉ころがしのつくりかたををしへ、大き  
な者には、グライダーのもけいをつくる工作が進められたのであります。

そしてこれらの品は、本國の出征兵士に慰問品みもんひんとして、玉ころがしを送つたり、  
あるひは毎年十二月に東京で開かれるドイツ人の慈善市じざんいち（ミザー）に出して、その

賣上金をドイツ國防獻金こくはうけんきんに送ることにきめたのであります。

第二回目の工作日のことでした。私は大森驛おほもりえきをおりてしづかな坂みちをユーゲントの家近くまで來かかると、右がはの電柱でんちゅうのかげから、ふいにをさないユーゲントの一人が、ポケットをおさへたまま飛出して來たのであります。

『先生、ねんどざいくは、これでいいでせうか。』

と、つくりあげたねんどの軍かんを、ポケットからこつそりととり出して見せるのであります。

かんばんに大砲がいつぱいとりつけてあります。

『ほう、これはなかなかよくできました。しかし、えんとつがありませんね。』

『大砲をたくさんとりつけたので、えんとつはつけられなくなつてしまつたのです。』

『では、大砲をすこしとつてえんとつを一つつけると、もつとよくなります。』

『ありがたう、先生。』

と、少年は大喜びでふたたびポケットをかかへこむと、ユীগントの家の方へとんでかへるのでありました。

又すこし行くと、また電柱のかげから、一人の少年が走り出て來たのであります。

『先生、ねんどざいくはこれでいいでせうか。』

と、大事にとざした兩手を、こそりとひろげて見せるのであります。

やせたくまが、大きなつめをとがらせてできあがつてゐるのでした。

『ほう、なかなかうまくできました。でももうすこしふとらせてつくと、もつとよくなります。』

『先生、ありがたう。』

その少年も、にこにこ飛んでかへるのでありました。

またすこし行くと、また一人がとび出して來たのであります。

かうして幾人かの少年が、かはるがはる電柱のかげからにこにこととび出して來ては、海近くにうまれた者は海のものをつくり、山にうまれた者は山のものをこしらへて、ねつしんに私にたづねてをしへをもとめるのであります。





九、奉 祝 の 町



皇紀二千六百年十一月十一日。

日本國中は、ばんざいの聲と、ひるがへる日の丸の旗にうづめられて、町にも村にも、野にも山にも、をどり屋臺やたいの笛たいこは朝から鳴りひびいて、日本人は一人のこらずこのすぐれた國にうまれた喜びを新たに、笑顔でお祝ひの言葉をとりかはしたのであります。

私の働くドイツ・レンズ商會でも仕事を休んで、社員たちは國民服やモーニング服で晴やかにせいれつすると、午前九時から皇紀二千六百年奉祝式がおごそかにおこなはれたのであります。支店長さんが日獨社員一同とお祝ひのさかづきをさつとあげて、日本ばんざい、ドイツばんざいのさけびを高らかにあげると、窓の外の丸の内いつたいは人の波で、そのなかを、數萬の女子青年團員がラッパ、笛、たいこで行進するとどろきや、鳴りもやまない奉祝自轉車隊のベルのひびき

や、乗馬隊のひづめの音、みこしの聲、花電車のにぎはひ、それにまじつて道の八方からわきあがつてくる旗行列の奉祝歌などが、事務所の窓ガラスを絶えまなくゆすつて、空には數をました花火が、ポポン、ポロポロ、サツと、なほも高鳴るのであります。

私は今さらに日本人であることのほこりを胸一ぱいにさせて、式の終つた事務所を出ようとすると、支店長さんに、ふと聲をかけられたのであります。

『森田くん、今日はすこしおねがひがあるのですが。』

『はい、なんでせうか。』

『日本に来て、このよき日をむかへた私は、一生一代の幸福者といはなければなりません。それについて何か記念品を買ひたいと思ふのですが、横濱の町までいっしょに来ていただけないでせうか。』

『さういふことなら、喜んでおともいたしませう。』

ちやりん、ちやりんと金ばうの音に、わつしよい、わつしよいと子供のみこしが、ならんで通ると、そのあとから百餘臺の大人のみこしが、道いつぱいにもまゐりて行くなかを、私たちは禮装の人にみちた省線電車にゆられて、まもなく横濱の町に着いたのであります。

横濱の港も、りつぱな晴天でありました。

一萬トン以上の汽船も、せんだうさんがさをでこぐ小さな舟も、ほぼしらへ満艦飾をほどこして、奉祝の日のしほ風はその旗の一つ一つをやさしくひるがへしてゐるのであります。

『さあ、ここで買物をしませう。』

と、支店長さんは、海岸どほりのある一軒の大きな店先をくぐつたので、私も

つづきますと、店内には輸出物せんものの、外國人のこのみに合ふやうにつくられた齒の浮くやうな物ばかりが、ならべられてゐるのでした。きらびやかなおびや、はおりや、ふりそでの着物などが、ぎらぎらとちんれつされてゐるかと思ふと、その下のだんには、朱や金銀でぬりたてた茶わんや、花びんや、あるひは五重塔と鳥居などをきざみこんだ、たばこ入れなどが店ぢゆうにあふれてゐて、何一つとしてこのおごそかに祝ひたてまつる、皇紀二千六百年の記念の品となるやうな物はないのでありました。

しかし支店長さんは、空と海とに鳴りやまない花火の音や、みこしの聲を窓ごしにききながら、目を細くして、妻へのおくり物にといつて、でこでこにかざりたてたはおりや、おびなどをえらび出して私に言ふのでありました。

『日本の美しい藝術、それが私にはよくわかります。これを買ふことにしませう。』

私は、しづかに口をきつたのであります。

『支店長さん、あなたはこんな物を、日本の藝術品と思つてはいけません。これらの品は、みな輸出向きにつくられた物ばかりで、日本人でさへも買はない物ばかりです。』

『いや、いや、私にはこのすばらしさがわかるのです。この品から、日本の美しいすがたを心ゆくまでくみとることができるのです。』

私は、悲しくなつて、支店長さんにつめよつたのであります。

『あなたが、こんな物をほんたうの日本の藝術品であると思ふなら、私は日本のめいよのために、今日かぎりあなたとおつき合ひをやめることにいたします。』

支店長さんはびつくりして、私の顔をじつと見すゑたのであります。

私も負けまいとその顔をにらみかへしたのであります。ことに皇紀二千六百年

の奉祝にもかかはりのあることですから、一步も引くまいと、なほも下からにらみかへしたのであります。

やがて支店長さんは、強く大きく一つうなづくと、私の手をしつかりとその兩手ににぎりしめたのであります。

「森田くん。私は日本をよく知つたつもりであたが、日本とは、そんななまやさしい國ではなかつたのだ。萬世一系の天子様をここに二千六百年もいただいてきたからには、人の心にも、國の藝術にも、私たちドイツ人などがはかり知ることのできないおく深いものを持つてゐるにちがひないのだ。我はも一度、日本をまなぶ勉強をしなほすことにいたしませう。今日の品物はすべてあなたにおまかせするから、何なりともよろしくえらんでいただきたい。」

私はにつこりと、その大きな手のひらをにぎりかへすと、その店を出たのであ



ります。

そしてほかの店でいくつかの上品な物をえらんで、支店長さんに渡したのであります。

『あなたが、ほんたう日本を知つたときに、これらの品品の美しさがわがると思ひます。』

『ありがたう。じつにたのしい奉祝日であつた。』

私たちは、横濱、東京と喜びの町や人出を心ゆくまでながめて、夕方わかれたのであります。

下宿近くへもどると、どこの家も、もうのきのちやうちんに灯を入れて、町會事務所の前では、これから町内を一めぐりするちやうちん行列の子供や、大人たちがみちにあふれて、おんがく隊はみどり色の服に赤いトルコばうして、大小の

しんちゆうラツパをちやうちんの灯に光らせて、さかんに吹きたててゐるのであります。

下宿のへやへもどつた私は、どつこいしよと、つかれたこしをおろしたとき、わつと、いきなり聲をあげてとびあがつたのであります。

机の上には、大きなあつい手紙が一通、ドイツ切手を三枚もはつて乗つてゐるのであります。

見れば、まぎれもなく差出人は、ケーテ・クルーゼと、タイプライターでしつかりとうたれてゐるのであります。つひに來たのだ。五月に出した手紙のへんじが、半年もかかつて、戦亂せんらんのヨーロッパから、しかも日本の紀元二千六百年奉祝のこのよい日にとどいたのであります。

私はむちゆうで封ふうを切ると、やさしくペンで走らせたドイツ文字に目を見はつ

たのであります。

親愛なる森田雪夫さま。

ただ今あなたのお手紙と、お寫眞を拜見して、私は、あまりのおどろきと喜びとで、身のおきどころもないほどでございます。

あなたの横に寫されたゆりかごの中のお人形は、まさしく私の愛兒フリッツと申す者でございます。

思ひおこせば、今から二十年ほど前、フリッツが二歳のをりにモデルとして、「ゆめ見るみどり子」といふ題でつくりあげたものに相違ございません。

しかし悲しいことには、「ゆめ見るみどり子」だけは、私の手帳に所有者の名がしるされてなく、今日まで一日としてフリッツのゆめを見ない日とてはないほどでございます。

ところが、はからずも、そんなけいする日本のあなたのもとにそだてられてゐることを知つた私のこの喜びは、ぬぐふあとからほほに涙を今つたはらせてをります。フリッツは、今りつばなドイツ青年になりました。祖國のためにつるぎをとつて、先日フランスをおとしいれ、今また前線でイギリス軍隊をつぎつぎにげきめつさせてをります。

森田雪夫さま。

私はそんなけいする日本婦人のやうに、わが子がたたかひに出たからには、楯たてに乗つて歸ることをかくごし、またのぞんでもをります。

イギリス本國へせめ入るドイツ作戦も、ここ數箇月のうちと思ひます。私の手もとに、フリッツのめいよある骨が、一にぎりの灰ほことなつてとどく日も間近のことでありませう。その場合、今後のフリッツをそだててくださる者は日本の

あなたです。

あなたは、今後のフリッツのおとうさまです。

おとうさまよ。フリッツはこの母の顔を二十年あまりも見てをりませんし、祖國のけしきも、をさない目には、もはや見忘れたこととぞんじますので、ここに私の寫眞と、ドイツ名所ゑはがきを三組ほど入れておきますから、フリッツにお見せくださいます。そしてドイツの血しほをうけついでフリッツに、愛してやまない大和魂やまとたましひをしつかりとつぎこんで、りつぱに成長せいちょうさせてくださいますやう、くれぐれもおねがひ申しあげます。

なほフリッツのからだは、かもしかの毛で出來てをります。また手足のふしぶしには、ろくろがしかけてございます。どうぞ月に一ぺん、おふろに入れて、頭髮かみはうなどもよく石けんでお洗ひくださいます。別便べつびんを以て春秋の着せか

へ衣裳箱送りました。

日本のおとうさまへ

ドイツの母より

私はクルーゼ夫人の手紙に胸をうたれて、中からあらはれた一葉の貴婦人の写真と、ベルリン名所ゑはがきを手にしたまま立ちつくしてゐますと、をりから町内のちやうちん行列は、おんがく隊をせんとくに歌聲をとどろかして、數百の紅ちやうちんをふりながら、小路をまづかにそめて行進して來たのであります。

私はまどに立つと、このたくましい日本のすがたをフリツツに知らせるために「ゆめ見るみどり子」のゆりかごを、しづかにそののきにつるしたのであります。その下を、おんがく隊は一きは高くラツパ、たいこをひびかせてすぎさると、つづいて子供、大人、老人のふる紅ちやうちんが、まどの手すりにぶつかり、はね

かへり、銀河の空をそめながら、あとからあとからと、奉祝歌も高らかにつづくのでありました。

金鷄<sup>きんし</sup>かがやく

日本の

はえある光

身にうけて

いまこそ祝へ

このあした

紀元は

二千六百年

ああ一億の

胸はなる

歡喜あふるる

この土を

しつかとわれら

ふみしめて

はるかにあふぐ

大御言オホミコト

紀元は

二千六百年

ああ肇國テウコクの

雲青し

すさぶ世界に

ただ一つ

ゆるがぬ御代に

生ナひ立ちし

感謝は清き

火ともえて

紀元は

二千六百年

ああ報國の

血は勇む——。



## あとがき

私は、世界にかゝやく日本の、皇紀二千六百年祝典を眼のあたりに拜して、この聖代に生をうけた日本の童話作家の一人として、これを祝ひ奉る童話を書きたいと願つてをりました。

それで、あれや、これやと、いろいろ書くものを考へてゐました。

ところが、はからずも、一つのドイツ人形をめぐつて、今はドイツ大使館にえられる、守屋三郎氏とドイツ國人ケーテ・クルーゼ夫人とのあひだにうまれた美しい話をうかがつて、これこそ、私にあたへられた奉祝童話であると感じたのであります。

私は少年の頃から、白人のなかで好きな民族は、ドイツ人だけでありました。これは第一次世界大戦のときに、全世界を相手にたたかつたドイツが、刀折れ、矢つき、食糧をうしなつてたふれた姿が、その頃の少年であつた私に、どこか日本の武士に似た魂を感じさせるものがあつたからです。

それから二十有餘年、世の中はうつりかはつて、ふたたび今また第二次世界大戦は開始されたのであります。

我が日本は、盟友ドイツ、イタリヤと誓ひを固くして、世界の大國アメリカ、イギリスなど十餘ヶ國を向かふにまはして、國をあげてたたかつてをります。國民の一人として、童話作家である私の血も、たぎりにたぎらないわけにはいきません。いつ、なんどきでも、ペンをすてて、さあ來いと、銃をとつて出て征く覺悟もできてをります。

この日本初つて以來の一大國難に際して、私は後世にのこる童話を、今いうとうと書かうとは思ひません。敵國米英を打ちたふすに何らかの力となる童話を只只一心に書くだけの努力をつゞけてをります。

この「ドイツ人形」は、このほどやうやくできあがつた、皇紀二千六百年奉祝日獨親善童話として書いたものです。幸にこゝに御刊行くださつた鶴書房御主人にありがたく感謝いたします。

昭和十七年十月

東京市本郷區本郷五丁目四五

土 家 由 岐 雄

認承協文出

號 200037 あ



人形ツイド

定價

金壹圓八拾錢  
送料二十錢

昭和十七年十一月二十日印刷  
昭和十七年十一月二十五日發行

〔五〇〇〇部〕

著者

土家由岐雄  
フタキ ユキオ

發行者

田中貫行  
タナカ カニキョウ

印刷者

波邊駿三  
ナミエ シュンゾウ

（東京一）大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社

發行所

鶴書房

東京市日本橋區久松町十三番地

文協會員番號一一八〇一五  
電話浪花(67)五一六番  
振替東京八二三五五番

# 鶴書房新刊特選童話

土家由岐雄著

山崎醇之輔 裝幀挿畫

風

鈴

(ひらがな長篇童話)

維新の義商榷本六兵衛の外  
國貿易報國を中心に當時の  
列國の我が國に對する態度  
をおもしろく書いてある史  
外よみもの。

A5判美裝函入  
二 三 四 頁  
定價 一、八〇  
送料 、二〇

川崎 大治著

井口文秀 裝幀挿畫

花

とピニアノ

(ひらがな童話集)

高度な情操教育を窺つた低  
學年向のものは稀である。  
本書は積極的にそれを窺つ  
た。二色刷の挿畫は藝術の  
香高きものである。

A5判美裝函入  
二 二 四 頁  
定價 二、〇〇  
送料 、二〇

村岡 花子著

川島はるよ 裝幀挿畫

たんぽぽの目

(ひらがな童話集)

良い子の生活の樂しさ、日  
常生活から拾つたお話、二  
三四年にたのしまれ、そし  
てお母さん方にも是非よん  
でいたゞきたいと思ふ。

A5判美裝函入  
二 五 六 頁  
定價 一、六〇  
送料 、二〇

小出 正吾著

六郷好見 裝幀挿畫

北カラ來タ汽車

(カタカナ童話集)

幼児の心理にふさはしい内  
容と、表現はリズムを尊重  
し、それに配するに二色刷  
の挿畫をゆたかに挿入した  
ものである。

A5判美裝函入  
二 三 二 頁  
定價 二、〇〇  
送料 、二〇







児935-113



\*1200600485875\*





